

燈 光

3



新しい東京湾海上交通センターが誕生しました！

東京湾海上交通センター

はじめに

東京湾海上交通センターは、昭和52年2月、我が国初めての海上交通センターとして、観音埼に設置され40年余り、東京湾内の船舶交通の安全確保のため、情報提供業務と浦賀水道航路及び中ノ瀬航路の管制業務を実施してきましたが、平成29年12月1日をもって、東京湾における一元的な海上交通管制を実現するため、運用場所を横浜市中区の横浜第二合同庁舎22階に移しました。平成25年10月の第三次交通ビジョンをスタートに、「現場海域が視認できずに大丈夫か？」等、さまざまな賛否の意見が渦巻く中、各種課題を乗り越え4年余り、遂に、平成30年1月1日、横浜、東京、川崎及び千葉の4つの港内交通管制室を統合した新しい東京湾海上交通センターを発足させ、1月31日、新制度による運用を開始しました。

平成29年12月1日の横浜移転、1月1日の組織発足

及び1月31日の新制度運用について、現場目線での状況を写真と織り交ぜながら報告させていただきます。

1 横浜移転

(1) 新運用場所（横浜第二合同庁舎）

平成29年12月1日午前9時、横須賀市の観音埼から横浜市中区の第二合同庁舎に、「運用を止めることなく移転なんて不可能だ！」「とわれていた任務がスタートします。この日の「栄えある当直」に選ばれたメンバーらが観音埼からの切り替え、引き継ぎ手順につ



写真1：最終確認をする管制官

いて最終確認を行い、予定の午前10時、いよいよ観音埼から横浜に運用を切り替えます。

統括運用管制官からスタンバイの号令がかかり、運用管制官たちは手を上げて応えます。そ

して、「切り替えー」の令が響きました。

切り替え5秒後には、さっそく船舶から「東京マーチス」を呼ぶ声が受信機から流れます。記念すべき「こちら東京マーチス」の第一声を発したのは、湾口エリア担当の運用管制官でした。

切り替え後、新たな通報先に次々と入航予定の通報が入り、計画卓担当の運用管制官も受付に追われました。

新センターの目玉のひとつがダイヤグラム表です。航路通報等に基づいて作成された管制計画は、列車の



写真2：運用の切り替え時



写真3：第一声



写真4：航路通報受付

運行ダイヤのように、東京湾を航行する船舶のダイヤグラムとして自動に表示されます。これまで運用管制官は、入湾船舶にあつては浦賀水道航路の入航時刻のみに着目していましたが、目的港の着岸予定時刻にも着目した管制計画を策定することとなり、結果として、港内の管制信号待ちを無くするような管制が、東京湾入り口から実施されるようになります。これが今回の管制の一元化の目的の1つといえるもので、本領を発揮するのは、31日以降の新制度の運用開始後です。

(2) 旧運用場所（横須賀市観音埼）

同日午前10時、統括運用管制官が、横浜の統括運用管制官と業務引継ぎが円滑に終えた連絡を取り合います。そして、「引き継ぎを確認した！」と声を上げました。すると、40年余り、この運用室にて、東京湾の船舶交通の安全確保に万全を期した運用管制官達は、自然発生的に「万歳！」と喚起の渦が起きました。



写真 5：新兵器の湾口～入出港のダイアグラム



写真 6：観音埼の管制官は万歳



写真 7：無人の運用室

そして、運用を止めると即座に新しい横浜の運用室に持ち込まなければならない書類等を2台の官用車に詰め込み、人的移動も含め、慌しい移動作業が展開され、気づくと、40年間、一度も無人とならなかった運用室は無人となりました。

観音埼局は、この日、この時間をもって、整備課職員1名体制による日直となりました。翌日の2日（土）と9日（土）、2回に分け、4トントラック延べ10台による引越しを行いました。また、局舎の無人化に向けた閉塞工事も急ピッチで進められ、18日までに、玄



写真 8、9：玄関口閉塞 表側・内側

関口の閉塞、窓の木板閉鎖を完了し、19日には、SSBアンテナ周りの感電防止のフェンス張り工事を終え、一通りの防犯対策を施したところで職員の日直体制も解き、完全無人化としました。

日本初の西洋式灯台である観音埼灯台、日本初の海上交通センターである観音埼船舶通航信号所と、2つの日本初の航路標識は、これで観音埼からすべて無人化（観音埼船舶通航信号所は横浜船舶通航信号所の付属施設の観音埼レーダー施設）されたことになり、時代の流れを感じました。

2 新組織発足

平成30年1月1日午前9時過ぎ、新センターとして、初めて当直に入る運用管制官及び技術官らに両次長を加えた職員を前に、三宅所長から年頭挨拶も兼ねた新センター発足の訓示が行われました。海上交通管制の一元化として、4つの港内交通管制室を統合した総勢119名の大所帯組織が生まれた瞬間です。

所長からの「海上交

通センターの歴史に新たな1ページを加える」という熱い言葉に、職員一同、その責務の大きさを噛み締めると同時に、国民の期待に挑む闘志を醸し出していました。

改変された組織構



写真10：所長訓示

成のポイントは3つあります。

1 つめは、これまで、庶務・管理業務も合わせた「整備課」の中に技術官が配置されていましたが、機器の高度化に伴う技術力の向上、港内信号施設も一体的に広域保守する起動性の確保等も踏まえ、管理業務を行う「企画課」を別に作り、機器・施設の保守を専門に行う技術官で占められた「技術課」を単独で作りました。

2 つめは、運用管制官の業務を支える事務として、これまで、日勤の運用管制官を便宜上に配置し対応した事務と、安全対策官が担っていた資格認定等の事務を統合して実施する「安全計画課」を新設しました。

3 つめは、運用管制課の課制を廃止し、所長の下に、非常災害が、休日・夜間、いつ発生しても適切な初動体制が確保できるように、「運用管制課長が24時間常駐する体制作り」の理念で、課長の名称を「上席統括運用管制官」とし、当直班の数に応じ複数名配置して、当直班長の指揮を執れるように、当直の中に組み入れるようにしました。

また、この日は、伊豆大島西岸沖に国際条約に基づく我が国初の推薦航路を設定する日でもあり、バーチャルAIS航路標識を活用して航行船舶の流れを分離

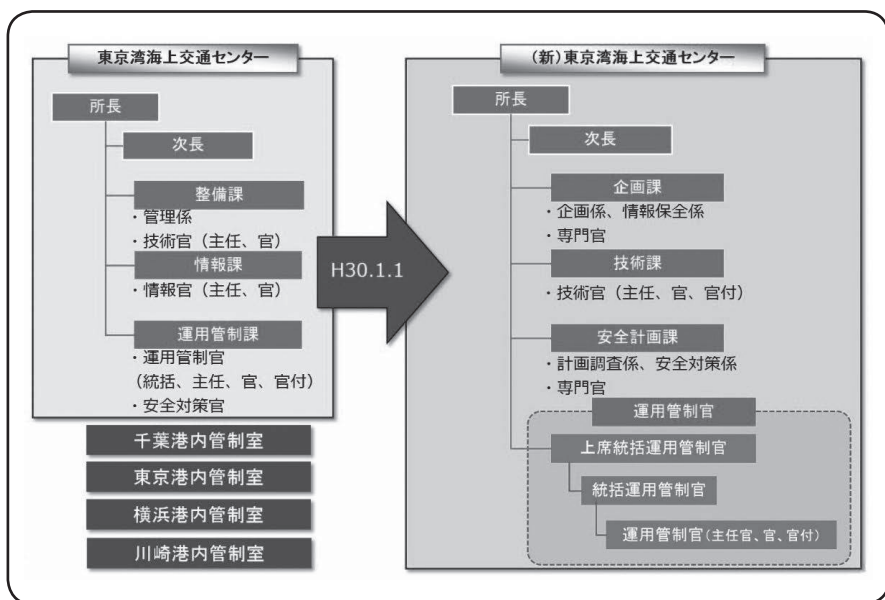


図1：組織構成

するため、ジャスト午前9時(世界標準時の0時0分)、AIS運用卓からAISメッセージ21を使用し、2つの航路標識情報を送信しました。これは、横浜第二合同庁舎の運用室が「横浜AIS信号所」となる新たな電波標識が新設された瞬間でもあります。

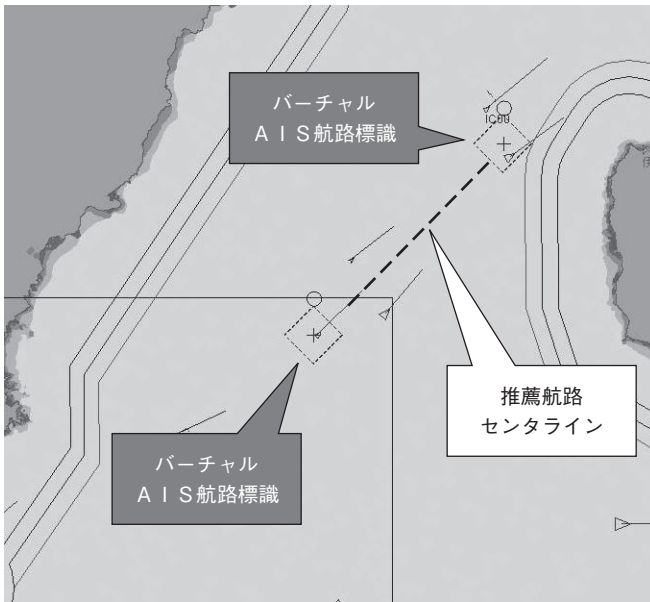


図2：バーチャルAIS航路標識

3 新制度による運用開始

新組織となった以降は、新制度による運用を前に、万全な体制としておくことを重点に取り組みました。

新制度の下では、航行船舶に対して、リーダー等の監視情報からVHF無線電話で指示・勧告等を行う特定海域(船舶側に「情報聴取義務」を課す海域)は、格段に広がることから、運用管制官は、安全確保の強化と、運航効率の向上にかかる重圧に対処すべく、当直班単位、または個人で管制技能に磨きを掛けます。

また、改正海上交通安全法等の肝とも言える非常災害発生時の対応には、当庁幹部や国民も関心が高いことから、東京湾内に大津波警報が発表された場合の対応が、適切に実施できるかの状況を、長官、次長、海上保安監、総務部長等に、訓練を通して見ていただく視察を繰り返し受け、そして、1月29日には、報道機関を招き、非常災害時の対応訓練取材していただきました。

そして、新制度運用が近づくに連れ、海事関係者からの問い合わせ等も極度に増すこととなり、「事前通報の省略は、どのような場合に適用されるの?」、「入域通報のタイミングは?」これまでの位置通報ライン

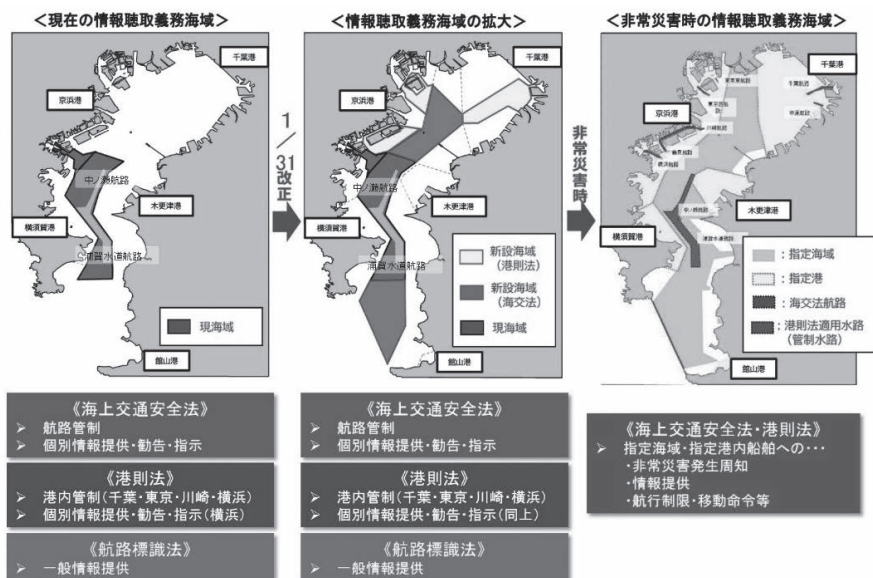


図3：情報聴取義務海域の拡大

ってどうなるの？」
 といった質問への対応に、運用管制官や新しく出来た企画課職員も悲鳴を上げる日々が続き、いよいよ、1月31日の朝を迎えました。

大勢の報道機関を前にした第三管区海上保安本部長と所長

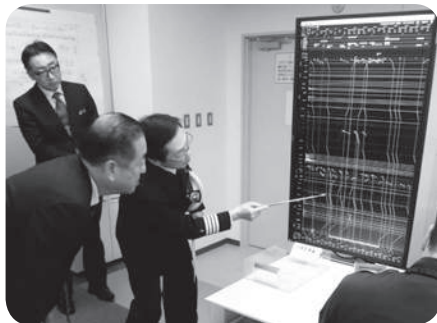


写真13：新兵器ダイヤグラムを視察される長官

写真11、12：長官による訓練視察の状況



写真15：記者に囲まれ、
グラ下がり取材を受ける三宅所長



写真14：大根本部長と三宅所長による
看板かけ

による看板かけ、その後に
本部長から訓示を受けて、
センター職員一同、「遂に
この日が来た！ ここまで
漕ぎ着けた！」と、1つの
達成感を抱きつつ、また、
この日訪れた記者達の取材
攻勢等、我々に与えられた
使命の大きさを改めて認識
しました。

この初日、非常災害が発
生しても対応できる自信を
持ち、港内管制と一体化し
た湾内の管制業務を、無難
に、かつ円滑に実施し終え、
また、港則法事前通報の省
略についても、船舶代理店
に対し、事務が軽減となる
仕組みを、正しく理解させ
た実績も作れました。今後、
一元化効果を発揮し、国民
の期待により応えるべく、



写真16：運用状況

全力投球して参ります。

おわりに

東京湾における一元的な海上交通管制の構築は、「全国初」となる海上交通センターの移転を、大きなトラブルも無く予定どおり実施することに成功し、組織も支障なく立ち上げ、1月31日の新制度による運用開始も順調なスタートを切りました。ここまで約5カ年にわたり、第三次交通ビジョンの策定、予算獲得、定員確保、法改正、そして整備工事等々、本庁、本部、さらには、このプロジェクトに関わった多くの関係者の方々のご尽力、そして賜ったご指導に、この紙面を借りて深く感謝申し上げます。

なお、今回の一連の取組において、過去の資料等から、改めて観音埼の地に、東京湾海上交通センターを初めて設置させた先輩方の、察して余るほどの苦難・ご努力の一端も知ることができました。横浜に運用場所を変え、新しいスタイルでの海上交通センターとなっても、諸先輩方が海上交通センターを我が国に設置・運用させた、その熱意と行動力は、我々現役世代にも引き継がれておりますことを報告し、ゞさせていただきます。

平成 30 年度の入道埼灯台の参観について

入道埼灯台（秋田県男鹿市）は、
4月14日（土）から11月4日（日）の間、
参観業務を行います。
皆さまのご訪問をお待ちしています。

日本海に突出した男鹿半島は、なだらかな起伏をもった草原の台地で、「なまはげ」や「男鹿ブリコ」などで知られており、入道埼灯台は、その北西端に位置し、芝草に覆われた緑のスロープの中心に建っています。



▶お問い合わせ先

燈光会入道埼支所
燈光会事務局

☎ 090-1931-9706
☎ 03-3501-1054
Eメール info@tokokai.org



大型灯台にパワーLED光源を採用へ

～明治150年の節目にあつて更なる進化を続ける灯台光源～

海上保安庁交通部・海上保安試験研究センター

ともに、運用上の問題点の検証を行います。

2 期間

平成30年2月21日（水）から当面の間

3 場所

釧路埼灯台（第二管区海上保安本部 釧路海上保安部）
北海道釧路市米町2-9-5

1 目的

従来のLED灯器は光達距離12マイルが限度であり、それを超える光達距離が必要な大型灯台では代替は困難な状況にありました。

このため、新たな光源としてCOB (Chip On Board) の利用可能性について検討を進め、今般、COBの中でも特に高出力なパワーLEDの実用化の目処が付いたことから、実装試験により、その効果を確認すると

4 試験内容

現在使用している光源（ハロゲン電球）を新光源（パワーLED）に交換し試行運用を行う。

【効果（メリット）：釧路埼灯台（ハロゲン電球）での比較】

(1) 寿命 1000時間↓約50000時間 50倍
(2) 消費電力 1000W↓約100W

10分の1

5 その他

試験中、釧路埼灯台の光の強さ（光度）及び光の届く距離（光達距離）に変更はありません。

（参考）

1 パワーLEDとは

多数のLEDチップを直接基板に結合して単一規格とした光源をCOB（Chip On Board）といい、その中でも、特に高出力のものをパワーLEDと呼びます。

（特徴）

- (1) 複数のLEDチップが一体で光ることにより高輝度化が可能
- (2) 光度制御を電流により行うことが可能

この特徴により、今後は更にLED化が推進されるとともに、現在は数多くある光源をパワーLEDひとつに統一できます。



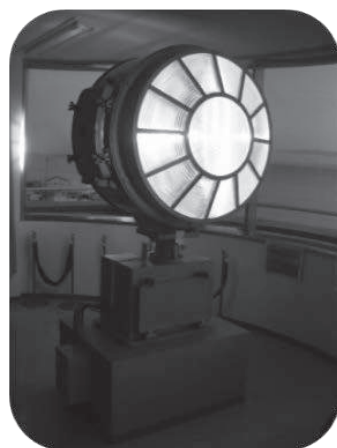
パワーLED
【COB（Chip On Board）】



ハロゲン電球



光 源



釧路埼灯台 LB-90型灯器

釧路埼灯台諸元

北緯

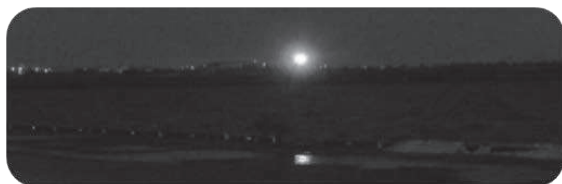
東経

構造物の色及び形

光り方

光の強さ

光の届く距離



現在の灯火状況

全
景

釧路埼灯台

19
.5海里

38000カンデラ

実効光度

15秒ごとに白光1閃光

白地に赤横帯2本塗 塔形

144度22分24秒

42度58分10秒

灯台の貴重な空撮ビデオを紹介します

空撮を趣味とされる丸屋空撮（ペンネーム）様から、ラジコンヘリ（マルチコプター）で撮影された犬吠埼灯台をはじめ、著名な灯台の動画を改めて紹介させていただきます。

鳥になった気分で、白亜の灯台周辺の空中散歩を堪能ください。

なお、燈光会ホームページでも紹介されていますので、併せてご覧ください。

記

他（P16・P27）

鮫角灯台


<https://www.youtube.com/watch?v=Mg4QGEfw-ak>

入道灯台


<https://www.youtube.com/watch?v=rXQfXBnb0ok>

金華山灯台


<https://www.youtube.com/watch?v=6Pskfftq30Y>

塩屋埼灯台


<http://youtu.be/aV1K7Uof9Wo>

日立灯台


<http://youtu.be/cTcsxYIQv9E>

犬吠埼灯台


<http://youtu.be/OhF6Eq9tk0w>

ある少女と灯台をめぐる物語

―永遠に語り継ごう大震災―

福島海上保安部

未曾有の被害をもたらした東日本大震災から、早7年を迎えようとしています。

福島県も大きな被害を受けましたが、港の復興、試験操業の拡大、帰宅困難区域の一部解除など、未だ復興半ばにありますが、時間の経過とともに復興に向けて着実に進んでおります。

福島海上保安部としても、福島の海の安心・安全を維持することで、地域貢献はもとより、復興の一助となるよう、「正義仁愛」の精神で日々業務に励んでおります。

ある少女とは、東日本大震災の津波による影響で犠牲となってしまった鈴木姫花（ひめか）さん（当時豊間小4年生）という女の子です。姫花さんは、（公社）灯光会主催の平成21年度灯台絵画コンクール（低学年の部）で塩屋埼灯台を描き（題名…わたしたちのとう台）見事入賞（佳作）（当時、3年生）しました。この受賞作品（レプリカ）については、現在も灯光会塩

屋埼支所が管理している掲示板に展示され、同灯台へ訪れる方々の目に留まっております。また、姫花さんには、将来、デザイナーになりたいという夢があったようです。

津波により犠牲となってしまった姫花さんのことを知った京都のデザイナーが同作品を、「デザイナー鈴木姫花」のハンカチとして製作し、ハンカチ展等に出展され、多くの方々に反響を呼び、また、同ハンカチにあつては、被災を受けたご両親がこれまでの多くの方々への感謝の気持ちとして、自費でハンカチを製作し、地元みやげ店（山六観光）の協力を受け販売されております。なお、ハンカチの売り上げについては、地元自治体に寄付されております。

このように、東日本大震災で犠牲となられた一人の少女の物語が、大震災で大きなダメージを受けた記憶として今もなお語り継がれております。

更に、津波による悲劇を繰り返さないでほしいとの

思いから、写真家橋本直樹さん（郡山市出身、愛媛県在住）が姫花さんのハンカチのことをWebニュース等で知り、同じ福島県人として何かできないかと考え、ハンカチを世界に旅立たせることを思いつき、ハワイ島ヒロ地区の太平洋津波博物館を訪問し、姫花さんのハンカチを飾ってほしいとマーリン・ムリー館長等にお願したところ、快諾され、東日本大震災の展示コーナーにハンカチのモチーフと父貴（たかし）さんのメッセージが展示されることとなりました。



写真－１ ハンカチの旅



写真－２ 写真家 橋本直樹氏



写真－３ マーリン・ムリー館長

※父 貴さんメッセージ

亡くなった娘のために、親として一体何ができるだろうか。震災から半年が過ぎた頃、娘の描いた絵を信頼のおけるデザイナーに託し、ハンカチにしてもらいました。娘は天国でデザイナーになる夢を叶え、ハンカチとして人の役に立ち、彼女が稼いだお金は浄財となります。私たち夫婦は、そのお手伝いをする事で、彼女が生きているように感じ、私たちもまた生きていることを感じる事ができます。命や教訓、大切なものが忘れられませんが。



写真－５ 津波記念館展示コーナー



写真－４ ハンカチ展示

大震災から早くも
 7年を迎え、東北地
 方の復興も着々と進
 んでおりますが、未
 だ、試験操業や不敏
 な生活を余儀なくさ
 れている方もおられ
 ます。いつの時代に
 あっても過去の教訓
 やこのような話を通
 じ、後世に途絶える
 ことなく連綿と続い
 てほしいと思いま
 す。また、この重
 要性を永遠に語り継
 がれていくことが大
 切であると痛感して
 おります。

灯台の貴重な空撮ビデオを紹介します

太東埼灯台



<https://www.youtube.com/watch?v=fCbTVJgiH0M>

勝浦灯台



<http://youtu.be/Sxnn6dxtxyo>

野島埼灯台



<http://youtu.be/jgXAPWzGEjo>

洲埼灯台



https://youtu.be/CW6p_TopUDQ

観音埼灯台



<http://youtu.be/GvG0B760kYs>

城ヶ島灯台



<http://youtu.be/tiZxNdNhX0>

劔埼灯台



<http://youtu.be/u81p7Q5ik-I>

湘南港灯台・江ノ島灯台



<http://youtu.be/dgx3lhx2mUk>



ラバーズ有志が東京、横浜、京都から名古屋に集合し、まゆうさんも含め19名で2017年11月17日（金）に志摩に向かった。

近鉄特急で賢島に到着すると、志摩市役所観光商工課の天白さんと岩城さんが待つておられた。講演会の前時間を利用して、まずお二人に案内をお願いし、地元へのあいさつ代わりに、チャーターしたバスで大王埼灯台と麦埼灯台に向かった（図―1）。

ラバーズの国内ツアーは、おおむね年に1度実施され、神奈川県江ノ島で『ライトハウスキーパー』という日本で唯一の灯台グッズを専門的に販売する雑貨店のオーナーの山口義昭リーダーが中心で企画・実施してはや18年になる。実はこの地で2008年にも、本ツアーが開催されている。自分は、2004年にこの会に入会したが、会社勤めの身であるため、年によって参加がかなわないことがあるが、この2008年には参加できた。その時にも大王埼灯台を訪ねた。今回は2回目である。ご縁を感じる。

日本には、中に立ち入り、登って景色を眺められる参観灯台が15基あるが、この地に、大王埼灯台と安乗埼灯台の2基があるのは、偶然ではないだろう。志摩・鳥羽には日本を代表するリアス式海岸があり、険礁や



写真―1

暗岩が多い海の難所でもある。海の幸が豊富なので、そこに多くの漁港があり、日本の基幹港である名古屋港に向かう伊勢湾の入り口であることから、灯台設置の需要があるのは当然のことである。数えてはいないが、絶対数と密度としては、この地の灯台数は半端な数ではないだろう。大王埼は、志摩半島の南東端に位置する。地名は大王町波切なみきりといい、その名の通り遠州灘と熊野灘の荒波をスパッと切り分けるように突き出ている。その突端の海食台地の断崖に立つ白亜の灯台に、ラバーズ全員で上った。

昔から、船の事故が多い土地であつたが、大正時代に二度の大きな海難事故があつたことがきっかけで、この地に灯台が建ち、昭和2（1927）年10月に点灯された。突き出た岬の本当に突端に建っているのので、階段を上って回廊に出ると360度眺めの良い場所です、天気にも恵まれ、絶景である。と、ブーンという音と共に、黒のドローンが海上の方から近づいてきた。なんと我々ラバーズを歓迎し、空撮しようという市役所の粋な計らいであつた。全員が、突き出た灯室前の回廊に出て手を振ったところで何度かシャッターが切られた。ラバーズからもシャッターを切るカメラ好きが、ドローンを攻撃するように撮影し、真つ向勝負を

かけていたのがわかる写真である（写真—1—）。

ドローンでの空撮が手軽となり、鳥の目でしか見られない、驚くような構図の写真や動画をたやすく見ることが出来る時代になった。また、こうした歓迎をうけるということから、灯台趣味が少しずつ世間で抵抗なく理解されるようになり、時代が変化してきていることが肌で感じられるようになった。

一方、どの灯台を巡っても必ず飛んでいるトンビが、この岬でも悠々と飛翔し、時代が変わっても変わらぬ光景も残っていた。

この灯台の特徴の一つは、地元住民の居住区の近くに建っていることだろう。灯台へ続く港から延びる道沿いの土産物屋などは、灯台ができてから建つたのだろうが、その手前の港の近くにひしめく人家からの距離が非常に近いのである。後で、市庁舎で面会した関係者の方の中には、小さいころからこの灯台を見て育つたという方がいた。灯台は、淋しい風景の中で、孤独にすくと建つイメージがあるが、ここは人々が暮らす街で、日常の風景に溶け込み、夜になるとけなげに働く姿を間近で見せてくれる珍しい灯台であつた。

灯台の北寄りの階段を下りていくと、海沿いに波切神社があつた。この神社は、航行の無事を祈る地元の

人々の精神的な拠り所となっていた。そこで購入できる「みち灯り守^{あか}」には、投光する大王埼灯台の姿が織りで描かれていた。波は切れても、人々の切なる思いはつながっているのである。

帰りは、神社からの階段を下りて右手に折れ、内湾沿いに歩くと、ショートカットでバスが待っている駐車場に出ることができた。その近くには、手ごろな値段で真珠を売る店があり、ここには表面全部を真珠で覆われた贅沢な灯台のタワーが店先に陳列されていた。店の中には、客の姿はなかったが、眠そうな猫がソファアーに横になってあくびをしているのどかな場所だった。

さらに麦埼灯台を目指す。ここへ行くために、賢島駅近くの「サミット記念館」にも寄らず、近くで英虞湾の一番の絶景が眺められると言われる「横山展望台」も寄らないことが、バスに乗った直後に満場一致で決議された。ともかく灯台一直線の同志で、メンバーに迷いはないのである。

麦埼灯台は、地名は志摩市志摩町で、東西に横たわる前島半島のほぼ中央で南端に位置し、南の布施田水道（熊野灘）を照らす白亜の大型灯台である。前回のツアーではここに来ていないので、初めて出会う灯台



写真－2

である。灯台は、徒歩で人家を抜け、背の低い常緑樹の林を抜けたところに建っていた。距離感としては、大王埼灯台と同じく住宅地に近い場所に建つ灯台であるが、手前の林の中にコンクリート製の手洗いがあるだけで、観光地化されていなかった。ここは参観灯台ではないものの、灯台と海の間には景色をぼーっと眺めることができる四阿^{あずまや}があり、その前で灯台をバックにメンバー全員で記念撮影をした（写真－2）。また、潮風などでペンキが剥けてしまっているもの、最近では珍しい、海女^{あま}さんの全身が描かれた記念撮影顔出しのパネルも健在であった。そう、この海は「日

本の残したい音風景百選」に選ばれた海女の磯笛が聞こえる海なのである。今は、海女漁の季節ではないので、その音風景を体感することはかなわなかったが、海の波音だけがする穏やかな場所だった。磯笛とはどんな音色がするのだろうか。

灯台の前には、ずるずると海岸に崩れるような道があり、灯台に登らなくとも景色は上々。澄んだ水と打ち寄せる波を間近に見ることができる。灯台と海の距離感がいい。驚いたことに、その海を30度ほど右手はるかに眺めれば、岩礁だけがあるらしい狭い場所に1基海中にすくと建つ小型の灯台が見え、さらに右90度先を見れば、海岸線が見えてそこにも灯台があった。まさにどこを向いても灯台が見えるというくらい密度の高さである。さらに、左に200度くらいぐると振り返れば、先ほどの大王埼灯台の姿も眺められた。

この辺の岩石は、若干赤みがかったレンガ色の雲母のようで、手でもボロボロ崩れ、岬ができる太古の昔に、岩石同士が強い圧力でぶつかり合った場所のようであった。

灯台趣味で何を見るかというと、同じラバーズであっても、メンバーによって注目するポイントが異なるようである。自分には、まゆうさんのフレネルレンズ

のような灯台について深い造詣はないが、好奇心だけは人一倍あるつもりである。例えば、灯台のボディについた明り取りの窓の個性が好きである。どなたが決めているのか、灯台によって異なるのである。

大王埼灯台の窓は、長方形の片上げ窓だったが、この麦埼灯台の窓は、ハメゴロシの丸い潜水艦の窓のような明り取りのためのような窓である（翌18日に訪ねた、安乗埼灯台のも同じ丸窓であった）。灯台が好きだと、灯台の何かを見て、おかずがなくてもご飯がおいかわりできるくらいにいろいろと観察することができるといふ特技が自然に身につくのである。

しばらくして、皆で歩いてバスに戻った。市庁舎で竹内市長に会う時間までには、少し時間があるというので、英虞湾の景色を望む「桐垣展望台」に立ち寄ってもらうことにする。

バスを降りたところが、英虞湾を見晴らす展望台であった。志摩の展望台は、翌日もう一箇所立ち寄ったが、いずれもそれ程高くない山の頂のような場所、不思議なことにも高すぎず低すぎず、同じような高さの場所が開けているので、空も広く見えてその解放感が清々しい。G7サミットの会場として使われた「志摩観光ホテル」が正面の彼方に見える。手前の海の中に

浮かぶ筏は、天白さんのお話によれば、真珠の養殖がされているという（北にある的矢湾に浮かぶ筏では、牡蠣が養殖されているとのこと、場所を分けて海が利用されている）。海が入り組んで、陸には海岸がなく、直ぐに鬱蒼とした常緑樹が茂っているので島なのか陸続きなのか分からないが、それも気にならなくなるような、引き込まれるような景色であった。また、その複雑な風景の中に、他にはない国立公園としての風格のようなものを感じた。「志摩」は、まさに「島」の地であることを、この景色が如実に表現していた。

そのあと移動し、いよいよ竹内市長とご面会するために、市庁舎を訪ねた。竹内市長とは前回2008年の国内ツアーでも、志摩町長時代にお会いしており、安乗埼灯台前でラバーズの面々と記念撮影した写真が残っている。その写真と同じニコニコ顔の竹内市長に、ラバーズが一人ずつ手短に挨拶し、竹内市長からは来年（2018年）この地で灯台サミットを開催したいと考えられていることの意気込みを伺った。さらに、「安乗フグ」、「伊勢エビ」、「牡蠣」が地元の名産品とお話を伺い、時間は早いですが、夕食の期待が否応なく高まった。そのあと同席された市の産業振興部の方々からお話を伺った。部長の浅野さんが、大王町波切の

ご出身であった。さらに、同じ部署の久保さんは、麦埼灯台の近くのご出身。ミノウラさんは、安乗埼灯台の近くのご出身とのことで、めでたく志摩市の主な灯台がすべてカバーできる方々で市役所のチームが固められていることが理解できた。ただし、副市長の小山谷さんは、高所恐怖症とのことで、灯台を好きになっ

ていただくためには克服しなければならない課題が少々あるようだった。

最後に竹内市長を囲んで、志摩市のマーク（的矢湾と英虞湾でShimaの「S」の字が象られていた）と特産品が市松模様



写真－3

— 3 —

時間が来たので、いよいよ本日のメインイベントの講演会場に移動する。場所は、バスで5分ほどの志摩市商工会館である。広くて天井の高い板張りのホールだった。

時間になって、たくさんの人で会場はいっぱいになった。

まず、まゆうさんから、講演テーマの『灯台の愛し方、楽しみ方』を、「灯台の基本（『基礎知識』）」「（灯台の）三つの魅力」「（ご自身で見してきた）海外の灯台」の三つの観点から、スライドを用いて発表があった。「三つの魅力」とは、まゆうさんの見方である、（1）

灯台の近代建築物としての魅力、（2）レンズ・ライトアップの魅力、（3）灯台に携わる人々の魅力、のことである。ご自身の眼で見、足を運んだたくさんさんの灯台とそれに関係する人々の素晴らしさの説明があり、美しい灯台やその周りの見事な風景には思わず惹き込まれた。

その講演のあとに、竹内市長が司会者となり、まゆうさん、ラバーズメンバーの主婦代表の南賀和子^{なか}さん、同メンバーの元海上保安庁で灯台守の経験のある玉宮孝さんの4名で、ステージでパネルディスカッション

が行われた。その中で実際に大王埼灯台が来年の灯台サミットのメイン会場にもなるため、灯台を見に来る人をさらに増やすために何ができるかというテーマで話し合われた。その中で、まゆうさんからは、「灯台好き」ということを「物好き」という好奇の目ではなく、海外では地元の人たちが、自分たちの灯台を心から愛しており、同じように、志摩でも地元の灯台にもっと誇りを持てるようになれば、モチベーションとしても高くなり、外から来る灯台好きのヒトを自然に歓迎できるようになると思うという提案があった。さらに、そのために灯台に向かう道の美化などにもっと意識が高まれば、旅して灯台を見に来るヒト達を自然に歓迎できるようになるとされた。

会場からいろいろな意見が出て楽しいひと時を過ごすことができた。出席したラバーズの面々も、会場に多くのヒトが集まり、まゆうさんの講演に耳を傾け、パネルディスカッションに参加される熱意に、普段は余り感じることがない、ごく普通の人々の静かな灯台愛のようなものを感じることができた。来年この地で行われる灯台サミットにも、熱心な地元の人々がきつと多く集まることだろう。

その夜は、近くの「志摩スペイン村」に投宿。19名

ぐらいなら楽々飲み込める巨大なホテルであった。「スペイン」ではあるが、ホテルでいただいた食事は和風で、地元の美味しい海鮮が並んだ。

三重県は、美味しい日本酒が作られる土地として近年脚光を浴びている。「作」、「而今」、「るみ子の酒」などの銘柄を知っているが、残念ながらそれはメニューにはなかった。地元より、むしろ自分が住む関東圏の方が手に入りやすいのかもしれない。

ただし、メニューにあった「宮の雪」（宮崎本店、四日市）は、初対面であったが、調べてみると伊勢志摩サミットで提供された日本酒で、これを燗酒にしていたところ、辛口が際立ち、まことにしっかりとしたコンセプトを感じる味わいであった。

翌日は、予報のとおり雨になった。
風もなくシトシトと降る静かな雨であった。

当日の予定は、バスで安乗埼灯台へ向かい、鳥羽へ移動して菅島灯台を回り、鳥羽から夕方の近鉄特急で帰路につくばかり。したがって、それほど急ぐ旅程ではない。両方の灯台は前回2008年のツアーでも訪れており、今回は2回目であるが、いずれも個性があるので、再会が楽しみである。

安乗埼灯台もバスが灯台の近くの駐車場まで乗り付

けられる道があり、アクセスはよい。灯台へは駐車場から、松に囲まれた広々とした広場を突っ切って歩く。そこに足を踏み入れた先に灯台の姿が視界に入る。この灯台は、灯塔が四角柱であるのが特徴。灯室の周りの回廊も四角くなっている、イタリアのジェラードアイスを載せるコーンのように見える。傘をさして灯台を目指す。

灯台の入り口に平成25（2013）年に指定を受けた「登録有形文化財」のパネルがあり、その脇に「はまゆうの丘」の石碑が建つ。

場所としては、志摩半島の中央的矢湾の入り口の南の岬の突端に位置し、周囲は大王埼灯台と同じく暗礁が多く、海の難所である。この灯台の歴史は古く、初点灯は明治6（1873）年4月というから、約140年前に初代が建築された。1873年は西暦（グレゴリオ暦）が日本に導入された年でもある。初代は、八角形木造で英国人技師リチャード・ブランドンが指導し、日本で20数番目にできたという。今の灯台は、昭和23（1948）年8月にコンクリート製に改修されたが、灯室は八角形をしており、初代の遺伝子を残すという気持ちで伝わってくる。

灯台の手前の10段ほどの階段を上り、入口に入る。

朝早い時間なので、他に観光客はいない。灯塔の中の階段も内側が四角なので踊り場があり、ゆったりして登りやすい。最後は、L U M型灯器を見て、回廊に出ることができる。雨なので、傘をさす。堤防が突き出た先にも灯台が見える。全体に景色が霞んでいる。傘が風に取られるので、やむを得ずすぐに降りることにした。

この灯台のそばにも四阿があることを思い出した。灯台の右手の海のそばで、そこからやや見上げるように眺める灯台の姿が美しい。この灯台が紹介されるときの写真で有名な場所である。その場所にも立ってしばし灯台と対峙する。

広場に戻って、左手に灯台資料館がある。ここには、灯台に以前設置されていた4等のフレネルレンズや、初代の木造灯台の1/3の模型が展示されていた。

そのあと、バスに戻り、的矢湾大橋たもとの展望台からの矢湾の景色を眺め、昼食の後、菅島灯台に向かうために、志摩を後に鳥羽に移動した。菅島へは鳥羽の佐田浜港から市営の定期船で約20分で渡ることができる。鳥羽マリナーミナルの待合室で、菅島灯台の案内をしていただける予定の、地元海上保安部交通課の北島大輔さんにお会いする。連絡船は前回に来た

時より新しく格段に良くなっていた。定刻の14時に出航。船のそばをカモメが舞い、雨は小やみになっているが、やや霽って、周囲は幽玄な島と海の景色である。船は結構なスピードで快走する。途中、緑に点滅する防波堤灯台が見え、珍しいので写真に収めている間に菅島に到着。

菅島灯台へは、港から山道を徒歩で20分くらいかかる。途中、山道を抜けたところで、灯台が姿を現す。灯台はそばでじっくり眺めるのもいいが、景色の中に溶け込んで立つ姿も美しいと思う。黒々とした森の上に屹立する丸みを帯びた白い城のような建物。天気が悪いせいか昼間なのに、すでに点灯しているのが分かる。そこから、さらに6、7分ほど歩くと正面に灯台が全身を現す。灯台へ続く通路が舗装され、前回来た時よりも整備されている。

菅島灯台は、初点が明治6（1873）年7月で、安乗埼灯台と同じくプラントンの指導で建造された。特徴として、地元の瓦屋が焼いた白煉瓦で造られていて、現在は日本で最古の煉瓦造り灯台である。灯塔は円柱で、大きな分銅のような独特のどっしりとした安定感がある。白くきれいに塗装されているのは、ここも近年有形文化財として指定されたからかもしれない

い。北島さんが灯台の入り口の扉を開けてくれる。皆で灯台の中に入り、窓を見、灯器を眺め、回廊にも出た。この灯台の窓は、片上げ窓であったが、大王埼灯台より大きく正方形に近かった。ガラスの真ん中に木の仕切りがあり、外から見ると正方形に近い木枠が十字に仕切られて見えて、それが、入口の上方の正面に一つだけあるために、何かイワクありげなエンブレムのように見えた。塔そのものは、それほど高くないけれど、高台に建っているので眺めは極めて良い。ただし、天候のせいで海が暗く灰色だったのは残念であった。

思い思いに、灯台の中と周囲を見て回り、灯台の世界に浸る。灯台の前の空き地は灯台守たちが暮らした官舎跡である。その草むらに最近では珍しいカタツムリが角を出していた。

最後に皆で灯台をバックに記念撮影し（写真－４）、帰路についた。帰りは別のルートで、道が急だったが、近道だったので、あつという間に港に着いた。暖かい待合室で腰かけた時には、ほっとした。

ラバーズはなぜこんなに灯台が好きなのだろうか。

同じ灯台を二度見ても、そこに新しい発見があることが今回わかった。季節や天候が変われば、周りの風景や空の様子や色が異なり、灯台が見せる表情が変わ

る楽しみも想像できる。

一方で、周囲の景色に影響を受けながらも、建造物としては強固に大地に屹立し、見に行くものの期待を裏切ることがまずない安心感がある。

灯台は、非日常の世界に建っていると思う。灯台守が居た時代は、灯台守にとつて灯台は日常の存在であったはずだが、ラバーズという趣味人の立場で、日中は白亜の（あるいは縞模様（の）姿を見、夜になると光を放つ姿を見るだけで、自



写真－４

分が日常の世界から離れたところに来て、簡単に自覚することができる。灯台がある場所に来て、しばらくの時間を過ごすことにそれだけの価値があると思う。

日常から少し距離を置いて、何かを考える時間が少なからずある、そこに建っているのが灯台なのだろう。風雨風雪に耐え、船を守るといふ使命を持ちながら、自己主張せず、静かにそびえたち、夜は静かに点灯する姿に何か言いようのない頼もしさを感じない人はいないだろう。人間はせわしない日常のただけに、延々と留まっていることには苦痛を感じる。そんな時に、無意識に灯台好きは灯台を見に行くのだろうな。など、まとまりのつかないことを考えながら、16時15分発の鳥羽行きの船を待った。

機会があれば、または是非今回訪れた灯台に会いに、さらに、ラバーズの面々にも会うためにツアーに参加したいと思う。

本年（2018年）志摩であるという灯台サミットも、今から楽しみである。

最後に、このような、拙文を書く機会を与えてくださった山口リーダーと燈光の関係者の方に心よりお礼を申し上げます。

灯台の貴重な空撮ビデオを紹介します

爪木埼灯台



<http://youtu.be/BM0RWtMr-mM>

石廊埼灯台



http://youtu.be/p4EGO2R_7wY

清水灯台



<https://youtu.be/8haa5tWEmJk>

大王埼灯台



<https://youtu.be/Pfe2eemOm0>

掛塚灯台



<https://www.youtube.com/watch?v=gzVPHzt9eBo>

安乗埼灯台



<https://youtu.be/eolAyyYQ1GQ>

御前埼灯台



<http://youtu.be/uWCKfrhhwwI>

祿剛埼灯台



<https://www.youtube.com/watch?v=IGWdgmqp5DY>



巖流島灯台が導いた丈夫、

武蔵との出会い



普通会员 岩 尾 亮 二

大きなタイトルを掲げました。

文学的にも、歴史的にも武蔵に特別に興味を持ったこともなく武蔵の歴史小説で名高い吉川英治の「宮本武蔵」は私の生家の本棚には並んでいたのですが手に取り開いた記憶ありません。加藤清正が築いた武者返しの石垣で有名な熊本城。天守閣のすぐ北側に鬼門として歴史的に閉じられていた「不開門（あかずのもん）」があります。私が小学生のころは開かれており、お城の武者返しの石垣に取りつく様な急な坂道を登り城門をくぐり城内に入りました。あまりに急な坂道で、連れて行ってくれた太った伯父は息を切らしていました、私が大きなお尻を押しながら登った記憶があります。この城門が肥後、細川藩主に武蔵が仕え、役目として警備にあたった「不開門」であることなど知る由もなく。

また、生涯の夢を育む青春時代。夏目漱石の小説「草

枕」に出てくる峠の茶屋まで主人公と同じ道順で歩くという事で友人に誘われ、はいていた下駄ばきのままで（高校時代から校風がバンカラで通学にはよく下駄ばきでした）歩いたのですが、その道順が「武蔵終命の地」と言われる霊巖洞へ武蔵も通った道であることなどつゆとも知らず。

下宿屋のそばの肥後細川家が城主であった熊本城の桜は満開をすぎ若草色の梢がちらほら、生涯の道を導いた海上保安学校燈台科への入学、桜前線を追いついて京都舞鶴へ。東舞鶴の静かすぎる街並みから見た舞鶴湾は泳ぐ魚の群れが見えていて透き通っていました。

入学式が済み、徒手訓練を終えた後の海上保安官の制服での初めての外出日、町中にある舞鶴田辺城はやっと到達した桜前線の真っ只中、満開の桜で迎えてくれました。その舞鶴田辺城は、細川家の元居城であったことは案内で目にしました。

学校の厳しい規則にも慣れた夏休みの前、市外地下出許可を得て先輩卒業生が残したぼろ自転車に乗って、仲間数人で福井県高浜へサイクリング、途中で読んで字のごとく美しい砂浜に出くわし海に飛び込んだ久美浜。細川家の筆頭家老、松井家が久美浜城主であ

ったことなど知る由もなく、当然に細川、松井家に関する武蔵、小次郎の巖流島の決闘に結びつくこともなく、すれ違いのまま。

あえて記憶に残った武蔵との出会と言えば。

小学2、3年生の時と思い起こしますが、月刊漫画に「漫画王」と言う本があり、山、川での遊び大好き、勉強はそっちのけの私に少しでも活字に興味を向かわせるためだったのでしょうか、元小学校教師の母親が、本に親しむために漫画でもと言う思いで、一の返事で買ってくれていたのを思い出します。

その漫画王に宮本武蔵の連載がありました。

漫画王の武蔵は：

旅を続ける中、かたき討ちの老婆が色々な場面で現れます。

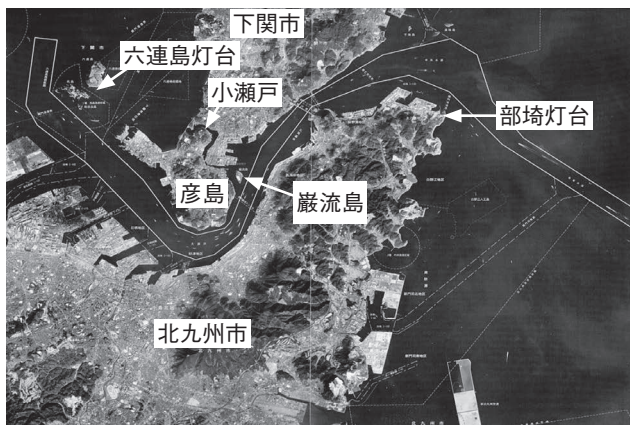
鉢巻をし、息子らしい若者の力を借りながら切り付ける老婆の刃から軽く身をかわし、老婆の手元を優しく握り絞めます。

刀を取り上げ、体を大切にするように論旨ながら、刀を返し鞘に納めさせます。

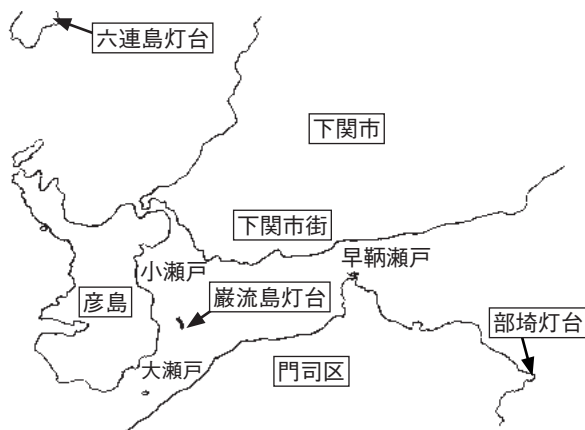
そのような心優しい武蔵像でした。

次に武蔵との出会と言えば、子育て時代の30歳台、今ではGPSシステムに取って変わって廃止となりましたが、当時は船舶、航空機に広く使われていた唯一の汎世界的航法システムの対馬オメガ局勤務、3年目を迎える異動の時期となった早春。

次の勤務は「海上保安学校の教官」と言う上司の耳打ちに、困ったな、困ったなと思いつながら「マックスウエルの電磁方程式」を紐解いていた私への内示は「関門航路標識事務所、信号課、第二整備係長」新設の係りで、北九州の工業の中心、洞海湾の船舶通航を司る牧山船舶通航信号所及び若松港内交通管制室の通信機器及びコンピューターによる船舶レーダー映像データー処理装置の整備業務。関門海峡全域の船舶通航管制処理装置の試験運用を兼ねた機器整備とレーダーデーター処理装置のオンライン化をメーカーと共に担当することになります。同時に信号課の中心業務は関門航路の潮流の速度と方向をコンピューターで解析し通航船舶に電光表示板及びラジオ放送で知らせると共に、付帯業務として関門海峡の航路標識の灯火の監視も行っており、関門橋の橋脚、橋梁が枠を切り取ったように見える巖流島灯台は双眼鏡で直接監視していました。



写真－１ 平成に入ってからの関門海峡



図－１ 関門海峡海図

巖流島灯台は瀬戸内海から南東水道に至り、関門海峡を東口から西口に抜け玄界灘に至る船舶にとっては要衝の指標ですが、よくよく船舶は見誤り、下関側の小瀬戸の海峡の入り江に入り、座礁します。関門海峡は一般的には皆さんあまり認識が薄いのですが、航空写真で示しますように彦島を挟む小瀬戸と大瀬戸の二

重の瀬戸の流れで九州と本州を分けています。その小瀬戸の方へ入り込み座礁するのです。その小瀬戸への出入口に蓋をするように舟島こと巖流島があります。ここで「舟島こと巖流島」について触れておきましょう。武蔵が小次郎と戦った戦国の世の時代、巖流島は舟島と呼ばれていたことは小説や文献に、よく紹介されています。舟島は下

関の港から約500メートルくらい沖にある島で、開発が進んでいない明治初期の海図を見ますと長さ100メートル強、幅50メートルくらいの砂浜も有るか無いか細長い島で、小説、映画などで描かれる武蔵、小次郎の砂浜での決闘がほんに行われたのか疑問に思えるような小さい島です。今の巖流島は、埋め立てと造成が進み彦島のすぐ目の前、平坦で一辺

が200メートル以上の三角形の島となり大きく様相を変えています。

決闘の時、武蔵は下関の舟問屋に宿泊して小舟に乗って舟島に渡っています。また、「巖流」は、豊前国細川藩に仕えていた小次郎の武術の流派の名であり小次郎に由来する名前です。普通であれば、勝った武蔵の流派に由来する「円明島」とか、武蔵の武術の銘「二天一流」に由来する「二天島」と呼ばれていてもいいような気も致しますが……。

下関で暮らしていて気付いたのですが、当地では判官びいきなのか巖流小次郎が長門の国隣、周防岩国の出身と言われているからなのか小次郎の話題が多く現在の御土産品等の名前も武蔵より小次郎に軍配が上がります。舟島が何時の時代から巖流島と呼ばれるようになったのか定かではありませんが、武蔵と小次郎の戦いの語り草の中で、長門の国で人気のある小次郎に由来する名前、巖流島と呼ばれるようになったののでしょうか……。

話を戻します。そこで、巖流島灯台を見誤り船舶が座礁しますと、潮流信号所の当直交代の引き継では、冗句を交えまして「また佐々木小次郎が船を引き込み貨物船座礁、巖流島灯台灯火は正常」つまり、「佐々

木小次郎の魂の怨念が船舶を小瀬戸に導き座礁させました」等の当直交代になっていたました。その潮流信号所勤務、牧山船舶通航信号所レーダー管制の勤務は、わずか1年少々で終わり、関門海峡の小倉側、壇ノ浦、巖流島を目の前に見下ろす事が出来ます第七管区海上保安本部の灯台勤務となり佐々木小次郎の魂に導かれ座礁する船舶を5年間見続けていました。

その後各地の転勤を重ね、13年後、関門航路標識事務所への再度の辞令を頂きます。

着任しますと船舶が見誤っていた巖流島灯台は役目を終え、船舶の安全航路の誘導の機能が優れた下関第二導灯が整備され役目を譲っています。

佐々木小次郎の魂の気持ちも治まったのか乗揚げ事



写真-2 在りし日の巖流島灯台

故は無くなりました。更に、当時は灯台部の組織整備が大きく進められていまして、航路標識事務所を廃止し航行援助センターへの組織整備の真っ只中。関門航路標識事務所の勤務も1年間で終わり、門司海上保安部航行援助センターへの転勤となります。

着任した航行援助センターの執務室の窓からは、更に巖流島は目の前。巖流島は以前より観光名所となっていてまして定期観光船も就航し、沢山の方が訪れる島となり、巖流島灯台の基礎部は観光客用の眺望ステーションに活用されていきました。仕事する傍ら振り向き、その眺望ステージの観光客の人影も見えるほどです。巖流島に沢山の方々が訪れるようになり「小次郎」も気持ちが治まったのでしょうか、座礁する船舶もなくなりました。

振り返ってみますと、関門海峡で通算9年間、私の39年間の海上保安庁生活の中で約4分の1が関門海峡に関わっていたことになりました。勤務していた当時、よく耳にしました言葉が、関門海峡の物流は日本経済のGDPにおいて20パーセントに関わっているという重要性。海峡の瀬戸内海側、南東水道には冬季から初春にかけてよく霧が発生します。

何隻もの通峡船舶が霧笛を「長ーく」鳴らしながら霧の中に微かな船影を残し早瀬瀬戸から巖流島の前、

大瀬戸を通峡する時に船舶事故が発生しなければいいな、小次郎の魂も穏やかであればいいな…と言う思いでした。

仕事真面目と言えば聞こえがいいのですが、9年間も巖流島を目前にしていながら宮本武蔵については小学生の時に読んだ漫画の世界のままに。

そして退官、生まれ故郷熊本、八代の地に根をおろしてみますと、昔の故郷とは大きく大きく変わっています。特に、九州三大祭りの一つと言われ、笠鉦がユネスコ世界文化遺産に指定された妙見祭。私が小さい頃は、激しい祭りで妙見神社への参拝客は御神酒のあがった飾り馬から追われ田んぼのあぜ道を逃げ回るような祭りでしたが、実に品が良くなっており衣装も昔の姿に復元されています。

私の故郷音痴に気づいた高校時代の同級生が早速誘ってくれたのが「八代歴史文化研究会」正式名称は「笹の会」細川家の豊前から肥後への転封と共に肥後国へ来られ、八代城主になられた肥後藩筆頭家老松井家の家紋「笹の紋」に由来する会の名前で、八代の歴史を学び八代松江城の城主であった松井家の伝統に由来する諸行事を勉強し支える会です。

そこで松井家の古文書、文化財を管理している一般法人松井文庫に巡り合い、八代の歴史、文化を身近に

接し体験する中、宮本武蔵が残した絵画、歴史的書き物、武具等が八代に所在を知ると同時に巖流島での決闘で関門海峡を小舟で渡りながら櫓を削って木刀を作り佐々木小次郎と戦ったと言う武闘家「宮本武蔵」とは違った「絵師」「工芸士」に加え「儒学者」と言えるような「武蔵」の遺品、作品に出会うことになりました。加えて、小説、資料などを読んでみずと、武蔵について諸説万乱、出身地も諸説あり、年齢さえも定かではありません。どうも、江戸時代に花が咲きました庶民文化としての講談、落語、歌舞伎等で針小棒大に語られたことに起因するようです。もともと、文学等におきまして縁が薄く浅学であり「宮本武蔵」を語る力はありません。しかし、最近の著書で「世の武蔵ものは八代を見落としている」や「熊本から遡らないと本当の武蔵は判らない」等の記述も見られ、古希を迎えた今、八代に残されています武蔵の歴史の一端や、保存されている絵画、工芸品、古文書等の紹介書籍を紐解いています。忘れ物も多くなった老人の所作であり不十分は承知の上、宮本武蔵がなぜ熊本に縁があったのかを切り口に武蔵の熊本を遡ってみようと思っています。

巖流島灯台との出会場で興味を持ち始め、灯台の仕事を終了し、故郷「八代」に根をおろし、還暦を過ぎ古

希を迎え武蔵が残した歴史に出会い、その幸をチョットだけつまみ食いさせてもらいました。今まで各地を転勤する中、沢山のすれ違いがあり色々な出会いがあったかもしれませんが、活字嫌い、本嫌い、好きなことは、海、山、川での遊び。その遊びでの出会い。

宮古島ロラン局勤務地でのスキューバー中、サメとの出会い。5メートルぐらいサンゴ礁の向こうで冷たい細い芽で私を見て悠々と体を曲結わせて去っていき

ました。
長島デッカ局でのマムシとの出会い、足をかまれてしまいました。

対馬オメガ局での身軽で愛くるしい対馬テンとの出会い。

奄美大島「曾津高埼灯台」での怖い、怖いハブとの出会い。

都井岬灯台での可愛い、可愛いウリ坊との出会い、何時も眠たそうな眼差しで草を食んでいた岬馬との出会い。

関門海峡で楽しそうに群れて泳ぐイルカとの出会い。

古希半ばに至り体力に限りを感じる今、武蔵との出会いで好きでなかった活字、本に向かい筆を取ってみました。

航路標識と氣象觀測（その6）

普通會員 門田雅康

7 中波の再編成

中波による無線方位信号所は、平成3年度には47局あったが、中波電波は、全国で限られた周波数を使用することから、混信を避けるために電波の発射時間を割当てて業務を行う必要がある、2～3局から同一の周波数が順次送信される方式であった。

この中波による船舶氣象通報は、1時間に4～5回通報されるが、利用者からは通報回数の増加を要望されており、これまでの方式ではこれに因應することが出来ないこと、また、中波電波を用いた測位の方法がこれまでの船舶の高速化に追従しなくなったこと、将来導入されることが検討されているDGPSのデータ通報用周波数として世界的に航行援助に使用されていること、中波標識の電波を使用することが勧告されていることから、これを見直し各局が常時電波を発射する方式に変更する必要があった。

このためには、周波数の再構築を行う必要があり、平成4年度の整備工事で、全国の中波無線方位信号所の再編成（廃止又は電波型式、空中線電力、通報時刻及び通報時間の変更）が行われ、中波電波を使用する無線方位信号所47局中29局を廃止し、さらに中波電波の有効利用を図る見地から、中波を利用した船舶氣象通報も、これまでの1時間に4～5回の通報から、常時氣象情報を通報する方式に変更した。

全国の中波無線方位信号所の再編成が行われたことから所要の改正（平成4年10月28日海上保安庁告示第120号）を行った。

その内容は、襟裳岬、野島埼及び足摺岬の中波による氣象通報を廃止し、松前、尻屋埼、金華山、犬吠埼、大王埼、室戸岬、軸倉島及び都井岬の通報内容を変更し、焼尻島、龍飛埼、鯉ヶ埼及び石廊埼各無線方位信号所が廃止されたことからそれぞれ灯台からの通報に変更した。

また、釧路埼から中波を利用した気象通報を開始、潮岬において電話による気象通報を開始し、気圧の単位を「ミリバール」から「ヘクトパスカル」に変更した。

再編後の中波無線方位信号所は18箇所であり、そのうち船舶気象通報を行う局は、都井岬無線方位信号所、室戸岬無線方位信号所、大王埼無線方位信号所、犬吠埼無線方位信号所、金華山無線方位信号所、尻屋埼無線方位信号所、釧路埼無線方位信号所、軸倉島無線方位信号所、松前無線方位信号所の9箇所となった。

一方、船舶に搭載する中波送受信設備は、SOLA S条約の改正に伴い、平成11年2月1日以降、搭載義務がなくなることから平成16年2月に中波無線標識局を廃止することとなり、平成18年9月軸倉島の廃止をもって中波電波による気象通報を終了した。

なお、中波無線標識局の送信装置は、平成9年以降、GPS局の補正情報を送信するディファレンシャルGPS局として運用されている。

8 船舶気象通報のテレホンサービス化

一方、船舶気象通報は無線を使用したサービスであるが、気象通報を行っていた灯台等に電話で気象の状

況を問い合わせる事例があり、それへの対応が航路標識業務に影響を及ぼすようになり、昭和59年度の管区監理課長会議において船舶気象通報の電話による問い合わせに対する解決策として、テレホンサービスの導入が議論され、気象庁等関係官庁と協議の結果、それまでの船舶気象通報の延長としてテレホンサービスを行うこととし、昭和61年から襟裳岬、大王埼、足摺岬（室戸岬を含む）、萩（見島・若宮・三島）及び軸倉島において、既定経費により試行的に、テープによる録音方式で自動応答装置を設置し、テレホンサービスによる情報の提供を行うこととなった。

このサービスは、出港前あるいは無線のサービス範囲外からも利用できることから利用度数は年を追って増加し、特に、軸倉島においては気象が西から変わってくることから、新潟方面の利用が増加した。1回線で始めたサービスも話中が多くなり、回線を逐次増加させ、平成6年度末には6回線でサービスを行っている。

また、萩においては、開始当時より利用数が多く、N T Tにおいて昭和61年8月18日に1回線の増設、昭和63年6月7日に2回線の増設を行っている実績があった。

このことから、海上保安庁としては回線の増設はNTTにおいて行わせる考えで、NTT本社と折衝したが、採算が合わないとして全国的なNTTによる回線増設はできなかった。

この船舶気象通報の開始に伴い、昭和61年2月15日、保灯監第54号「船舶気象通報のテレホンサービス実施要領（試行）」を制定し、昭和61年4月1日から試行的に開始した。

船舶気象通報のテレホンサービスは、船舶だけでなく、港湾工事業者、官庁及びレジャー関係者にとつて非常に有効なものとなり、回線の増設だけでなく新規のサービスを求める声が多く、昭和63年5月1日からは都井岬において都井岬及び佐多岬の、平成元年4月1日から新潟ロランにおいて沢崎鼻及び弾埼の、同10月1日からは観音埼において観音埼、伊豆大島、洲埼、劔埼、本牧、東京十三号地の、平成2年3月6日から小樽において積丹岬、焼尻島の、平成3年4月1日からは三国において経ヶ岬の、及び津軽海峡において集中化された船舶気象通報として松前、恵山岬、龍飛岬及び尻屋埼において松前、恵山岬、龍飛岬、大間埼及び尻屋埼の、平成4年2月1日からは男鹿において入道埼の、青ノ山において青ノ山、下津井、地藏埼及

び六島の、平成5年2月26日からは潮岬の、同年7月1日からは江埼において江埼及び地藏埼の、平成6年10月5日から釧路港でのそれぞれ電話によるサービスを開始した。

平成3年4月1日から津軽海峡の気象通報の集中化及び電話のサービスを正式の業務として開始することから船舶気象通報規程を改正した。

平成3年3月30日 海上保安庁告示第81号

第1条中「から無線電話」を「又は航路標識事務所から無線電話又は電話（その交換に関する事務が日本電信電話株式会社の事務所において行われるものに限る。以下同じ。）」に改める。

第2条の見出しを「（無線電話による気象通報）」に改め、同条中「気象通報を行う」を「無線電話により気象通報を行う」に、「別表」を「別表第1」に改める。

第3条第1項中「別表」を「別表第1及び別表第2」に改め、「2回くり返して」を削り、同条第2項中「1の航路標識」の下に「又は航路標識事務所」を加え、「連続したもの」を2回くり返して「を連続して」に改め、同条を第4条とし、第2条の次に次の1条を加える。

（電話による気象通報）

第3条 電話により気象通報を行う航路標識又は航

路標識事務所の名称並びに気象通報に使用する電話番号並びに気象観測を行う航路標識の名称及び通報事項は、別表第2のとおりとする。

別表を

無線電話により気象通報を行う航路標識の名称	呼出名称	電波の型式	空中線電力	周波数	通報時刻及び通報時間	気象観測を行う航路標識の名称	通報事項
-----------------------	------	-------	-------	-----	------------	----------------	------

(内容記載省略)

に改め

同表備考中「第3条第2項」を「第4条第2項」に改める。

別表を別表第1とし、同表の次に次の1表を加える。

別表第2 (第3条関係)

電話により気象通報を行う航路標識又は航路標識事務所の名称	電話番号	気象観測を行う航路標識の名称	通報事項
------------------------------	------	----------------	------

(内容記載省略)

一方、サービスの向上のため、平成4年2月1日から舩倉島の電話回線の増設が、輪島局から舩倉島NTT無線局間が回線満杯のため、提供場所を舩倉島から輪島航路標識事務所に變更し回線増を行った。

また、平成5年7月1日からデッカ局の廃止、ロランC局の導入に伴いロラン局をロランC局とロランA局に分けた関係から三国デッカ局を三国航路標識事務所に、新潟ロラン局を新潟ロランA局に變更し、さらに平成7年2月1日から三国を敦賀に統廃合する整備の関係から、組織整備に先行して三国を敦賀に變更した。

「船舶気象通報のテレホンサービス実施要領(試行)」は新規サービス開始に合わせ逐次所要の改正がなされた。平成元年頃から、テレホンサービスの利用効果は大きく、それまでは試行として行われていたものであるが、今後の整備を考え正規業務として実施することの検討が行われ、津軽海峡の気象通報の集中化及び電話でのサービス開始から正式の業務として開始することとし、船舶気象通報規程を改正(平成3年3月30日海上保安庁告示第81号)し、平成元年3月18日に「船舶気象通報のテレホンサービス実施要領」として試行

から正規業務として開始された。

その後、正式に整備を行い平成9年3月現在20箇所サービスを行っていたが、この中には当初の既定経費で導入したものが残されており、対大蔵省への説明には使えないことから、逐次整備費をかけて正式のテレホンサービスへ移行させることとした。

また、平成8年度航路整備事業費において船舶気象通報の整備が運輸省の重要事項として決定され、平成9年4月1日から下田（御前埼、石廊埼、伊豆大島）、御前埼（御前埼、石廊埼）、鹿児島（都井岬、佐多岬）及び宮古島（平久保埼、池間島）でテレホンサービス及びFAXサービスを開始した。

その後も逐次整備が行われ平成13年度から始まった航路標識事務所（74箇所）と海上保安部（66箇所）の統合などもあり平成15年4月1日にはテレホンサービスとして第十一管区海上保安本部、石垣海上保安部ほか25保安部、今治船舶通航信号所ほか4通航信号所、宮古島航路標識事務所ほか5事務所、都井岬灯台ほか13灯台の合計52箇所に整備され90箇所で見測した気象データを提供していた。

FAXサービスは、第十一管区海上保安本部、名瀬海上保安部ほか22保安部、宮古島航路標識事務所、都

井岬灯台ほか3灯台の合計29箇所に整備され74箇所で見測した気象データを提供していた。

9 DGPSタイプ16による通報の追加

中波電波を利用したDGPSは、平成9年3月22日から、大王埼及び剣埼で開始され、平成10年4月1日から金華山ほか11局、平成11年4月1日から宗谷岬ほか14局で運用を開始した。

平成16年11月1日から中波電波を利用したDGPSの情報の一部としてメッセージタイプ16で気象情報を通報することになった。

各DGPS通報箇所から送信される気象観測箇所数は最大6箇所でデータは5分間隔で提供30分に一回更新された。

DGPS局は、松前、積丹岬、釧路埼、宗谷岬、網走、尻屋埼、金華山、犬吠埼、浦安、剣埼、八丈島、名古屋、大王埼、江崎、室戸岬、瀬戸、大浜、若宮、大瀬崎、丹後、浜田、舳倉島、都井岬、吐噶喇中之島、八重瀬、宮古島の27箇所であった。

以上のように中波で開始された船舶気象通報はその後の中短波での通報、無線電話化、テレホンサービスの導入等の整備、中波電波でのGPS情報として気象

データの通報と拡充されていた。

10 インターネットによる気象データの提供

平成13年度から始まった航路標識事務所（74箇所）と海上保安部（66箇所）の統合にあわせて整備されてきた沿岸域情報提供システム（MICS）の整備完了に伴いインターネットによる気象データの提供を開始することとなり 船舶気象通報規程の一部改正が行われた。

海上保安庁告示 第44号

船舶気象通報規程の一部を改正する告示を次のように定め、平成14年2月15日から施行する。

船舶気象通報規程(昭和29年海上保安庁告示第1号)の一部を次のように改正する。

第一条中「又はファクシミリ」を「、ファクシミリ又はインターネット・ホームページ」に改める。

第五条第一項中「及び別表第三」を「、別表第三及び第四」に改め、同条を第六条とする。

第四条の次に次の一条を加える。

(インターネット・ホームページによる気象通報)

第五条 インターネットホーム・ページにより気象

通報を行う航路標識又は航路標識事務所の名称、気象通報に使用するインターネット・ホームページアドレス並びに気象観測を行う航路標識の名称及び通報事は別表第四のとおりとする。

別表第四

インターネット・ホームページにより気象通報を行う航路標識又は航路標識事務所等の名称		インターネット・ホームページアドレス		気象観測を行う航路標識名称		通報事項	
浜田海上保安部		(省略)		魚待鼻灯台		観測時刻、観測場所、風向、風速	観測時刻、観測場所、風向、風速
敦賀海上保安部		(省略)		石見大崎鼻灯台	観測時刻、観測場所、風向、風速、気圧		
				出雲日御碕灯台	観測時刻、観測場所、風向、風速		
				経ヶ岬灯台	観測時刻、観測場所、風向、風速、気圧		
越前岬灯台		立石埼灯台		観測時刻、観測場所、風向、風速		観測時刻、観測場所、風向、風速	観測時刻、観測場所、風向、風速

平成14年3月20日には、鹿児島海上保安部、油津海

上保安部、鳥羽海上保安部、室蘭海上保安部と整備され、逐次MICSの情報の一部として名瀬海上保安部など29箇所から、131箇所での観測結果が提供されている。

さらに航路標識事務所の統合などにより規定の一部を改正している。

海上保安庁告示 第119号

船舶気象通報規程の一部を改正する告示を次のように定め平成17年4月1日から施行する。

平成17年4月19日

船舶気象通報規程の一部を改正する告示

船舶気象通報規程（昭和29年海上保安庁告示第一号）の一部を次のように改正する。

第一条中「航路標識事務所、」を削り、「航路標識事務所等」を「海上保安部等」に改める。

第二条中「通報事項」を「観測種目」に改める。

第三条の見出し中。「電話」の下に「、インターネット・ホームページ等」を加え、同条中「電話」の下に「、ファクシミリ又はインターネット・ホームページ」を加え「航路標識事務所等」を「海上保安部等」に改め、「電話番号」の下に「、ファクシ

ミリ番号又はインターネット・ホームページアドレス」を加え、「通報事項」を「観測種目」に改める。
などの改正のほかに別表第一及び第二を改め

無線電話により気象通報を行う航路標識として、

1670・5kHzで、宮古島DGPS局、慶佐次ロランC局、都井岬無線方位信号所、足摺岬無線方位信号所、室戸岬無線方位信号所、大阪港船舶通航信号所、潮岬無線方位信号所、大王埼無線方位信号所、石廊埼灯台、八丈島無線方位信号所、野島埼無線方位信号所、犬吠埼無線方位信号所、金華山無線方位信号所、鯉ヶ埼灯台、尻屋埼無線方位信号所、襟裳岬無線方位信号所、釧路埼無線方位信号所、女島灯台、若宮灯台、琴埼灯台、見島灯台、多古鼻灯台、越前岬灯台、舩倉島無線方位信号所、粟島灯台、入道埼無線方位信号所、龍飛埼灯台、積丹岬無線方位信号所、焼尻島灯台の29箇所

同じく中波電波の無線電話により、都井岬無線方位信号所、室戸岬無線方位信号所、大王埼無線方位信号所、犬吠埼無線方位信号所、金華山無線方位信号所、尻屋埼無線方位信号所、釧路埼無線方位信号所、舩倉島無線方位信号所、松前無線方位信号所の9箇所

電話、ファクシミリ又はインターネット・ホームページにより気象通報を行う航路標識又は海上保安等として、電話及びインターネット・ホームページでは、第十一管区海上保安本部、石垣、鹿児島、油津、高知、大分、門司、徳山、広島、呉、松山、今治、尾道、玉野、高松、小松島、神戸、大阪（監）、鳥羽、四日市、下田、横須賀、横浜、東京、千葉、銚子、茨城、福島、塩釜、八戸、室蘭、釧路、根室、紋別、三池、長崎、佐世保、対馬、福岡、若松、仙崎、浜田、境、舞鶴、敦賀、七尾、伏木、新潟、酒田、秋田、青森、函館、小樽、留萌各保安部の54箇所

ファクシミリでは、下田、室蘭、釧路、根室、紋別、境、函館、小樽、留萌各保安部の9箇所

電話のみは、今治船舶通航信号所、青ノ山船舶通航信号所、江崎船舶通航信号所、潮岬灯台、尾鷲海上保安部、伊良湖岬船舶通航信号所、御前埼灯台、観音埼船舶通航信号所、野島埼灯台、犬吠埼灯台、西郷岬灯台、弾埼灯台、龍飛埼灯台、鵜島灯台の14箇所を提供されことになった。

この電話、ファクシミリ又はインターネットによる船舶気象通報は、平成27年10月から、海上保安庁が実

施する情報提供業務のあり方について検討され、船舶気象通報規程の一部を改正する告示が平成20年2月22日に出されている

海上保安庁告示第56号

船舶気象通報規定の一部を改正する告示を次のように定め、平成20年1月31日から施行する、

船舶気象通報規定の一部を改正する告示

船舶気象通報規程（昭和29年海上保安庁告示第1号）の一部を次のように改正する。

第一条中「ファクシミリ」を削る。

第三条の見出し中「電話、インターネット・ホームページ等」を「電話、インターネット・ホームページ」に改め、同条中「、ファクシミリ」及び「ファクシミリ番号」を削る。

11 波高観測の自動化

昭和45年10月から、三島（はぎみしま）で海底に波高計を設置し、萩航路標識事務所から遠隔で波高を観測する試験を行い、昭和46年4月1日から正式に業務を開始した。

その後、若宮、上対馬にも設置し、昭和47年度には積丹岬にも設置された。

しかしながら、海底に設置した波高計の維持は困難を極めたので、平成11年度から15年度にかけて、海上保安試験研究センターでレーダーを使用した波高観測について調査研究を行った結果、レーダーで得られた波高値を風向・風速で補正することにより実用化できることが確認され、平成16年3月20日から大王埼灯台で、同年4月1日から都井岬灯台の2箇所で開催を開始した。

この波高計の整備により、これまでの目視による波・うねりの観測が自動化されることから、職員の配置が必要なくなり、直接管理が解消された。

さらに、利用者から航路近傍における波高データの要望もあり、平成26年3月から灯浮標にGPS波高計を設置して、AISデータとして通報を開始した。

これらの結果、平成29年4月現在、レーダー波高計が、神威岬、襟裳岬、尻屋埼、龍飛崎、金華山、犬吠埼、野島埼、八丈島、大王埼、潮岬、都井岬、大瀬埼、若宮、三島、見島北、舩倉島の各灯台、16箇所に、GPS波高計によるAISデータとして、浦賀水道航路南口東端AIS信号所、伊良湖水道航路南東方AIS信号所、洲本沖AIS信号所、平郡島南方AIS信号所、関門航路東口AIS信号所、関門航路西口AIS

信号所の6箇所に整備されて、計22箇所で自動化されている。

目視観測として唯一、大阪船舶通航信号所の1箇所が残っており、合計23箇所で波高データが提供されている。

12 気象情報提供の終了

平成27年10月から、海上保安庁が実施する情報提供業務について、交通政策審議会の中に航路標識・情報提供等小委員会が設置され、業務のあり方について検討された。この検討の結果、利用率が著しく低下している情報提供手段の廃止や集約整理を行う方針が決定され、これを受けて、全国29箇所の中波電波（1670・5kHz）の船舶気象通報局、全国27箇所のディファレンシャルGPSからのタイプ16による気象データの提供を止めることとなり平成28年9月30日に廃止された。

帝政ロシアの文豪が見た日本



日本渡航記（その14）

徳力 真太郎 訳

第八章

一月四日朝

フレガート艦内は洗い清められ、すっかり祝賀の装いをこらしていた。昨夜は晩くまで砂利と砂で磨きあげていたので、私は少なからず夜の安息を妨げられた。しかし、その結果、甲板は亜麻布のように白くなり銅などの金具は日光にまばゆく輝き、索類は美事な輪になっていて、その一つを我々のマスコットの牡猫ワシカが絶好の住居としていた。こうして準備万端に整えられた。

後部甲板に信号旗を張りめぐらして式場が設けられて、四人の全権のための厚い敷物をしいた座席と従者達のための椅子席が設けられている。提督の部屋にも、全権の為に特別の卓と豪華な席が準備され、提督と三人の従者の為の卓がある。日本の式部官が坐るため特別の小卓を準備しておかなければならない。通訳のため二つの椅子を用意しておいたが、結局彼等はそれに腰かけて食事をすることを敢えてなし得ず、床に坐った。

十一時に、全権から提督への贈物を持参して役人が来船した。贈物は白木の箱に入れて台にのせてある。台は吊架に足をつけたような形をしている。この贈物のため卓上の配置をいくらか変更を余儀なくされた。床にじかにこの贈物を置くことは日本人に対して失礼に当たるだろう。この木箱には各々に例の「膠着性のシンボル」として紙片をたたんだものがつけてある。しかし、彼等の贈物は何と美事なものだ！

あるいは黒い漆塗りの手文庫で、黒地に金色で寺院や四阿や山や村等が浮彫になっている。漆塗りは特別に厚く、真黒く、聞くところでは数十年は剥げないというが、まるで鏡のように澄みきっている。こんな立派な漆器は世界中何処にも見当たらないだろう。別的小筐は、漆の中に埋められた赤金色の粉が斑の模様を美事に浮き出している。手文庫の他に色々なこまごました道具があった。日本人が腰にさげて歩く喫煙道具とその飾り物等である。また他の者の贈物は金の装飾のついた墨壺に、筆墨等の文房具と紙数帖と、おまけに色づきの蠟燭まで添えてあった。

しかし贈物の中で最も貴重で、特に目を惹いたのは刀であった。それは贈物の意義からみても価値からいっても一番貴重なものである。日本では刀を贈物とすることは親睦の心情の表現である。日本の刀が切れ味では、世界中で最も勝れたものの一つに数えられていることは異論のないところである。日本人は刀が国外に出ることを厳しく禁じている。栄之助の話が嘘でなければ、刀の切れ味は刑史がその刀で罪人を斬って試すと言う。刀匠は刀が出来ると、先ずそれを刑史の手に渡し、刑史は試し斬りをして、一振りで幾つの首は切り落とせるかをみる。そして、刀匠は刀身に首の箇

数を刻印するが、それが刀の価値を証明するという。提督に贈られた刀は、栄之助の話では、三つの首を切ることが出来る。刀は、日本では高価なものとなっており、刀身は常に鏡のように光っている。話に聞いたとおりいくら眺めていても見飽きるということがない。栄之助の差している刀は、人から贈られたもので、これもまた彼の話では、約五百年も経た古刀であるという。

私は刀剣のことはよく知らないが、川路の贈物の刀の刀身の輝きと美事な装飾には我を忘れて見惚れてしまふ。鞘は鮫の皮で作ったもので、汚れを防ぐため絹で覆ってある。筒井老人はこの刀に象嵌し、その他の高価な飾りを贈った。まだ、両国間の交渉が始まったばかりであることを考に入れれば、この贈物は驚くほど立派なものであると言える。全権自らが一再ならず語って我々を納得させようとしたことは、この贈物は日本の露国に対する親善関係を表すものであるという。贈物は勿論政府の承認を得て、否、命令によってなされたものであるということは、それに劣らず素晴らしい出来事であるといえよう。政府の意向を無視しては、日本人は、たとえどんな身分の者であろうと、何物も贈ったり受け取ったりすることが出来ないし、

それを犯す者もない。嘗て榮之助は、我方の水兵がある日本人に空瓶を与えたと、パシエートに声をひそめて告げた。

——それがどうかしたと言うのですか？

と彼が訊ねると

——瓶をお返ししたいから受け取って戴きたい。それしなければ瓶を貰った者が罰せられます。

——それなら海に棄てればよいではないか

——いや、それはできません。此処へ持参しますから、どうぞ貴方がお棄て下さい

何という国民だ！あらゆる密貿易を防遏するためのこの仕組みはどうだ！

このように一切の扉や窓を閉め切つて、しかもこれを開く鍵を失くしてしまつてゐる輩を對手にして、通商と、キリスト教や、文明の導入に希望をかけも、それはどんなことになるか？どんな方法で、いつそれが実現するのか？しかしそれは到来する。すぐでないにしても必ずその時機はやつてくる。

支那では既にそれが始まつており、その活動は精力的に続けられている。先頃、私は上海に行つたときに、ヨーロッパ人は南京条約の取り決めに従い境界線以上は一步も超えることは出来ないものだと思つて

いた。しかし私達は滞在中に郊外の何処へでも好きなところを歩きまわり、まるでホテルブルグのように勝手を知ることができた。支那が五つの港を解放してからまる十カ年が経過したが、現今ではヨーロッパ人は殆ど全部を支配している。それは既定事実を少しずつ段々に積み重ねてそうしたので。

例えば、支那では外国人に対して、その日のうちに馬で帰つてこられる距離ならば内陸に入ることが許可されている。しかし、上海のアメリカ領事は海岸から八十哩もある何処かの山中に別荘を持つてゐる。このことで省知事が抗議したことがあつたが、領事はこれに答えて「カトリックの布教師はそれより奥地の彼地此地に教会を建ててゐるではないか、知事は、彼等を追い出さない！そうすれば私も別荘を引き払おう」と言つた。布教師を追放することは出来ない相談だ。

彼等は、支那の土地に深く根を下ろしている。香港のカトリックの主教の話によると支那には五十万のカトリック信者がいるが、それらが布教師をかくまい彼等の仲に住まわす等あらゆる援助の手を尽くして庇護している。地方の長官は買収されているから布教師達は公然と活動している。知事はこの事実をよく知つてゐるのだから領事の抗弁にあうと言もない。また、あ

るときこのアメリカ領事が、五つの開港場以外の場所、それも北京のすぐ近くにある港へ船を仕立てていること、しかもその積荷が阿片であるらしいことを知った知事は、今度は強硬にしかも粘り強く抗議を続けた。しかし領事はまたしても反駁した。

——ヨーロッパ諸国に開いていないチュウサン列島に久しく以前からイギリス船が停泊しているが、それは何のためかご存知か？彼等を追放しなさい！

さすれば私は北京へ船を廻さない

知事はチュウサン島でイギリス船が何をしているかは勿論知っていたし、それを見ぬ振りをしてきたのだ。こうしてアメリカの船舶は何処へでも好きなところへ自由に行く。

一つの弱みを掴まれると、知事は十の違反を黙認しなければならぬ羽目になる。そうしなければどんなひどい目に会うかわからないのだ。彼こそ真つ先に自分で法を犯している弱みを持っているのだから。ヨーロッパ人は次第に大掛かりに侵略をほしいままにしてゆき、その被害が洪水のような勢いですぐ足もとに迫ってこれを阻止することが全く困難な状態になった頃、北京の中央政府ではやっと気付いたのだ。

しかし、こんな状態がいつまでも続くとするのは誤

りである。東洋の他のいたるところの国で、その住民は怠惰と無智から易々としてヨーロッパ人の保護の下に自らを投げ出し、やがてその保護者は狼の本性を露わして支配者として君臨している事情である。しかし、支那人はこれらとは異なっている。彼等はすぐれた商人で、たくましい商魂と投機的才能をもっている。この点ではアメリカ人やイギリス人よりも勝っており、国内の商権はしつかりと自身の手のうちに握っている。このためイギリス、アメリカはおろか他どんな国も支那の国内で商業的成功を勝ち得ることが出来ないばかりか、直接の取引の緒を掴むことすら出来ないでいる。貿易は支那人の仲買の手を経て行われているのだ。彼は、内陸に入って行き茶の栽培や絹の工場等を訪れてまわり、品物を買付けしている。

日本が、外国に門戸を開くとしてもその時期が到来するのには余程手間がかかると考えられている。それは戦争の火端を切ることによって日本が余儀なくされる手段によらなければ実現しないだろうからだ。そして、この点では日本は支那より遙かに有利な条件にある。もしこの国がヨーロッパ式の戦争技術を真似てその港を武装したら、外部からの侵略には安全である。このときは内部の裏切りのみが日本を滅亡させる。即

ち地方の大名に武器を供給して中央に反旗を翻す機会を与える。国内の何処かで内乱の火の手を挙げることに成功すれば——その時こそは日本はおしまいだ。しかしここ当分の間は、外国の威嚇に会えば何とか彼とか譲歩しながら、ただの空瓶さえ許可なしには自分のものにさせないほどの用心深さで身を守り、今日のままの体制を持ち続けることだろう。

自分だけに通用する主義と、古来の宗教と、素朴な道徳とつつましやかな生活方式を守って生きてゆくだろう。いま、一押しにこの門をこじ開けることも出来る。日本はこのように弱く、どんな種類の戦争にも耐えられないだろう。しかし、それを敢えて行うのは、つまりイギリスのやっている手を用いるということだ。どんな手だかという、先ず港に入り込み許可も得ずに上陸する。これを阻止しようとすれば喧嘩を仕掛ける。侮辱に対する報復だといって宣戦を布告する。あるいは



は、阿片を持ち込み、これを禁止するため嚴重な方策を構えると同じく戦争に訴えるのだ。

第九章

全権達は何をぐずぐずしているのか、なかなか来ない。我々はもう何回も船尾上甲板や船尾楼をぶらぶらと往ったり来たりして、その間に二回も厨房に駆けてゆき、蒸したてのピロシキ（ロシアの饅頭）やカツレツをほほばり、すっかり平らげてしまった程だ。

正午過ぎにやっと船団が岸を離れわが艦に向かってきた。五、六十隻の小舟の中央に屋根のある大きな船がゆるやかに動いてくる。赤い布を張り廻らした恰好は丁度二つの樞のよう、金色の弓矢や槍や棍棒が突き立ててある。舟は二階家になって、まわりは漕ぎ手のいる廊下がある。舟は二階家になって、まわりは漕ぎ手のいる廊下がある。上階は従者達が坐しており階下に

は全権自身が坐っている。沢山の小舟が曳綱でこの舟を曳き張っている、船首に日本人が立っていて、白い小さな箒のようなものを打ち振って曳舟を指揮している。銅羅を打ち鳴らし叫声をあげ、耳が聾するほど喧しい。二つの柩は儀式用のタラップのそばに並んで着けた。

役人や通訳達が、袋からこぼれるようにぞろぞろと這い出して、タラップを登ってきて甲板を埋めた。彼等が続いて六十名もの護衛兵が上ってきた。日本人は行列の威容で我々に負けたくないと考えている。わが方では従者達やその他の者の接待と、秩序を守るため、数名の士官を任命している。

最後に全権が登ってきた。パシエートと私が舷門で出迎え、提督は自分の船室の入口で彼らを迎えた。護衛兵達は、音楽を奏しつつ船尾楼に導いた。全権達に艦内を案内しようと思しでると悦んで応じた。まさか老人も来るとは思っていなかった。こんな老人に何処を見せればいいものかと案じたが、この老人は驚くべき強健ぶりを発揮して甲板を一廻りした後、一番船底の武器庫までもみて廻って一向に疲れた気配を見せなかった。彼等は目につくもの何にでも立ち止まって質問する。何か覆いのかけてあるもの、囲ってあるもの

などを見ると端を少し持ち上げて中にあるものは何か、何の役に立てえあるのかと聞く。

彼等を提督の部屋へ案内した。室内は綺麗に整頓されている。壁と扉は美しいマホガニー材で、床には絨毯が敷いてあり、窓には赤と緑の色彩の鮮やかなカーテンがかかっている。四人の全権のために縞模様のイギリス毛氈で覆われた、ゆったりとしてあまり高くない肘掛椅子が用意されていた。

この部屋で数分間過ごした後、一同は上甲板の式場へ出かけた。全権達の態度は上流階級の社交に馴れた人間らしく、落ち度がなくかつ澄ました態度で振る舞っているが、これまでヨーロッパの家具や装飾を見たことのない彼等には総てが驚異であつたことに相違ない。目につくもの、何も彼も始めて見る物だ。次の日に彼等はこの驚きを素直に告白したが、いまこの場ではその驚歎は、素振りでは勿論目の色にも示さない。音楽も彼等は始めて聞くものだろうが、全権のうち唯一人だけが、音楽の拍子に合わせて、丁度音楽好きの者がオペラを見るとときによくやるように、頭を振っていた。

彼等に茶を出した。そのうちに乗組員が甲板に整理して銃の操練をはじめ、ついで行進にうつった。四百

人もの員数が船尾から船首まで歩調を合わせて進み、櫓をまわって引き返してくる。最も目醒ましかったのは非常配備の警報が鳴り響いたときで、艙口、昇降口等あらゆる出口から鼠のように各々自分の持ち場の砲へ素早く散っていったことであつた。私はこの演習は見馴れていたが、何度見ても興味を惹かれるから、初めてこれを見る者は尚更であろう。彼等にまた砲の操練を見せた。

彼等は提督に感謝し、なお全員に感謝の気持ちを伝えて欲しいと請う。

スバシーボ
レビヤータ
諸君よ 有難う！

と提督が言うと、四百人の声が一斉にこれに応えた。

——ただ、全力を^{スタラトゥア}尽すだけです！

これも美事な風景であつた。

食卓は既に準備ができてゐる。全権と式部官の卓は提督の客室に設け、別の卓に提督と我々三人が坐つた。全権の従者達のためには、食堂に十一の席と将校集會室に十の席を設けた。護衛兵の席は砲甲板に、設けてある。

日本人は、食卓はすべてヨーロッパ式にと希望している。しかし、日本人にナイフやフォークで食事をさせるわけにもいかなないので箸を慥えておいた。彼等は

パンを食べないから、あたたかい飯を間断なく給仕した。スープは茶碗に入れて出した。食堂の従者達の卓にはジャムやケーキの皿が出してあつたが、客は出されてあるものは早速食べなければいけないと考えたのか、スープが出るまでに菓子や饅頭等の甘いものをつかり平らげてしまつた。

——これは何物ですか？

どの皿のものも一応は訊ねてみて、何となくためらう気配であつた。

大きな魚の皿が出ると、通訳は、「日本人は魚よりも肉を期待している。それは滅多に口にしないものであるから」と言う。日本人は肉が嫌いなものでは決してない。それどころか大好物だ。食べない理由は家畜が少ないので、それを労役に使うため食用にすることを禁じているのだ。その時に出した肉料理は羊肉とハムのピラフ（米に肉と胡椒等を入れた料理）だつたと覚えてゐる。牛肉は当時艦には貯蔵がなかった。その他の肉類は鳥肉や魚だけであつた。日本人は羊肉を食べて非常に満足げにみえた。特に四番目の全権はその様子で、皿のものを食べてしまふと自分で皿を給仕に渡し、もう一度ほしいという仕種をした。

卓子掛、ナプキンから卓上の塩入れに到るまでに彼

等は好奇に目をかがやかせた。しかし、日本人のために一言いっておくことは、彼等はヨーロッパ人のテールマナーに随分見慣れているとみえて、彼等の作法を見ても特に奇異とする点はなく、ヨーロッパ人と殆ど変わらなかった。ただそのうちで川路だけがほんのちよつとの間であるが日本人の習慣を示した。クリームのような、どろつとした菓子にビスケットを添えて出されたとき、彼は一口食べて、余程これが気に入つたと見え、懷中から紙を出して皿にある菓子をみんな包んで懷に隠した。が、我々の見ているのに気付いて言つた。

——こうしたからといって、誰か美人のところへ持つて行くのだらうなぞとは思わんで戴きたい。持ち帰つて家来共に与えたいのだ。

これがきっかけとなつていつの間にか話題は女のことになった。そして、日本人は節度を踏み外しそうなきわどい話にまで及ぶ。彼等も他のすべてのアジア民族と同様で感能の快樂の虜となり、終らせて、この弱点を隠そうとも、咎めようともしていない。このことについてもっと詳しく知りたいならケンフェルカツンベルトの著書を詠むことを薦める。特に後者はその日本旅行記のうち一章をこのことに関する記述で埋めて

いる。私は、日本の内部へ入ったことがなく、日本人と生活を伴にしたこともないので、この点についても彼等の交す会話から何かを捉えるだけである。

私とパシエートは、絶えず席を立つて彼等にシャンパンを注いだり、料理の食べ方をやってみたり、どんな材料で作つてあるのかを説明したりした。日本人は我々の鄭寧なもてなしと心のこもつた配慮に會つて却つてまごつき、どう感謝していいか知らない有様であつた。

全權達は特に加減しているようであつた。珍しさを目を輝かして一口ずつ飲んでいるがまだ一ぱいの杯を干さない。ただ背の高い肥えた四番目の全權はもう四杯目を空けた。

彼等に用件——明日の会談のことを仄めかすと、皆口をそろえて、盛大な接待と愉快な談笑にすっかり夢中になつて用件のことはさっぱりと忘れてしまつたと言つた。

通訳は床に這いつくばつていて、私が次の部屋に案内しようとしたが無駄であつた。彼等に食事をすすめても、高官と同席では全くとんでもないとばかり手を振つて辞退する。しかし彼等は咽喉をからからに乾かしている。吉兵衛は床に坐つて、まるで周りの犬に

伏えつかれているようにぐるぐると廻つて、ヘッ！ヘッ！と絶えず誰彼に應えている。宴の終り近くになる頃には、彼はすっかり声を潤らし目がかすんでしまったようだった。私は彼と榮之助にシャンパンの杯を注いでやった。彼等は拒まわろうとしかけたが、川路が頭を縦に振っているのを見て、額を床にすりつけて彼に向つてお辞儀をしてから貪るようにグラスを飲み干した。それから感謝の眼差しを私に向け、その印にグラスを額の高さまで上げた。

外の部屋をのぞいて見た。酒宴は正にその頂点にあつた。真赤になつた顔や至極上機嫌の笑顔が相当聞こし召したことを物語っている。彼等の中に一人、頭をつるつるの剃り丁髷のないものがいた。これは、医者である。医者と僧侶は髪をたくわえない。彼を我方のドクトルに引き合わせた。快活な人間でオランダ語を少々話す。

デザートの後で、日本側で熱い酒を出したのを真似て、グリントウエイン（香料入りの甘味酒）を出した。全権達は好奇心からみんなこれを口にしてホロ酔機嫌になった。

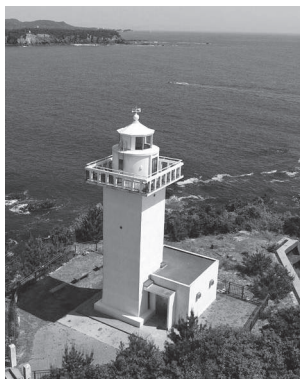
それから、これも日本人の習慣を真似て各々の全権の前に菓子の入った箱を出した。彼等はもう驚きと喜

悦を隠すことができず、アーンと歓声を發した。高価な美しい材で慥さえたモザイクの筐は美事であり、色々な鮮やかな彩の菓子は彼等の目を奪つた。なお次いで、モスクワやペテルブルグやロシアの軍隊の極彩色のグラビヤや、イギリスで買った婦人像や果実類や花卉等の絵画を見せ、それらを贈つた。またしても満足と驚きの歓声を發した。

暮色の迫つた頃、この異民族の襲撃は遂に終わりをつけた。再度彼等を訪問することをしきりに請いながら、我々の前から姿を消していった。

（以下次号）

★ のぼれる灯台 introduction ★



今月は…

★ 安乗埼灯台 ★

安乗埼灯台は、三重県東部志摩半島のほぼ中央部、的矢湾の入口に位置します。周囲には、暗礁が多く古くから安乗埼、大王埼、鎧埼をもって志摩3埼と称され海の難所として知られておりました。徳川幕府が船の道しるべとして燈明堂を建てたのが安乗埼灯台の始まりです。明治4年イギリス人技師ブラントンの設計、指導のもと木造八角型の灯台が着手されました。レンズは、日本で最初

のフレネル式せん光レンズ（第四等6面轆轤式）であり、イギリスのチャンスブラザーズ製のものでしたが、太平洋戦争で被災し現在に残っておりません。灯台はその後、海食等による地盤の崩れにより2度にわたり後退を余儀なくされ、昭和23年現在の位置に四角形の鉄筋コンクリート造に建て替えられました。そして、初代の木造灯台は当時現存する日本最古の木造建築であったため、移設を繰り返し現在は東京都品川区にある「船の科学館」にて保存されています。平成25年登録有形文化財に指定され、今年は初点から145年を迎えます。灯台の周辺は緑豊かな伊勢志摩国立公園に指定されており、散策やピクニックに最適です。これからの季節にぜひ安乗埼灯台へお出かけしてみたいはいかがでしょうか！

＊ ＊ 概 要 ＊ ＊

所在地	三重県志摩市阿児町安乗小山795		
位置	北緯34-21-54 東経136-54-30		
灯質(光り方)	単せん白光 毎15秒に1せん光		
光度(光の強さ)	380,000カンデラ		
光達距離	16.5海里（約31キロメートル）		
高さ	地上～灯塔頂部 15.0メートル	平均水面～灯火	35.0メートル
塗色・構造	白色 四角形 コンクリート造		
灯器	L U-M型灯器（Lighthouse Unit Metalhalidelamp）		
設計者	リチャード・ヘンリー・ブラントン		
着工	明治4年9月19日（1871年）		
竣工	明治6年4月1日 現在の灯塔 昭和23年（1948年）		
仮点灯	明治5年7月29日（1872年）		
初点灯	明治6年4月1日（1873年）		
参観開始	平成16年4月29日（2004年）		
アクセス	近鉄名古屋駅～近鉄鵜方駅～（三交バス）安乗中学校前下車～（徒歩）		



♪安乗埼灯台の思い出♪



40年ほど前におじいちゃんが安乗埼灯台の勤務でした。子どもの頃に来たことがあるそうなのですが、覚えていませんでした。次は子どもを連れてまた来たいです。



北海道から遊びに来て訪れました。タクシーの運転手さんのおすすめで、その運転手さんと一緒に灯台へ。おすすめスポットと聞いたとおり眼下には無限の景色、すばらしい一言です。

航海士を目指し勉強しています。安全な航海のため尽力下さり、いつもありがとうございます。



のぼれる
灯台11基目!!
日本を支える船乗り
さん達の安全を
見守ってくれて
ありがとう!!



夫婦の「きずな」
がなければ成し得
なかった灯台守の
心を感じました。



のぼれる
灯台14灯台目!
残るは沖縄、
いつ行くかな。



来ました!
(のぼれる灯台)
残り1つとなりました。
残り初島へ、来年は
行く予定です。



すばらしき
四角形灯台!!
心安らぐ
空間でした。

地球は
丸かった!
のぼれる灯台
4灯台制覇
バンザーイ!

明治の
灯台もいいけど、
昭和の灯台も
美しい。

娘と一緒にきました。ぐりとぐら（絵本）の真珠灯台のお話しがあて一度灯台へ行ききたかったので、来て良かったです。娘はとても喜んでいました。いい機会に来て良かったです。

「喜びも悲しみも～」のロケ地に来ました。20歳のとき長崎五島の大瀬埼灯台に行きました。あれから40年、まさしく、幾年月の人生いろんな苦難を乗り越え、今一番幸せを感じ生きています。感謝です。

◇◇◇◇◇ ～旧安乗埼灯台移設の経緯～ ◇◇◇◇◇

明治5年7月29日仮灯
正八角型、三階建、檣造
当時(昭和23年)現存する
最古の木造灯台により保
存される

1回目移設
東京へ



昭和24年6月
東京都へ払い下げられ、
浜離宮公園に開設された
灯台参考館の付属施設へ
移設



昭和29年3月12日
維持管理が困難で海上保安
協会が都に譲渡を願い出て
昭和29年7月9日
海上保安協会に譲渡される

海上保安協会は、財政面等
により海上保安庁へ援助を
申し出る

海上保安庁としても予算措
置ができないままに、移築
計画は困難

当時、東邦倉庫社長の勝宮
元氏が窮状を察知し、自分
が今日の産を成したのは、
海に働いて得たお陰である
とし、率先して移築費の寄
付を申し出た

(「燈光」昭和38年12月号参考)



昭和30年11月11日
神奈川県横浜市
旧第三管区海上保安本部構内の大
岡川口の航路標識及び試験灯台の
復元として移築活用

現在は船の科学館へ



昭和47年5月
海上保安庁から、
日本海事振興財団へ寄付
昭和47年7月
東京都品川区にある
「船の科学館」へ移築

初代から受け継がれてい
るものは、灯籠と入口の
扉のみとのこと。
(「燈光」平成21年1月号参考)

2回目移設
横浜へ

3回目移設
東京へ

燈光歌壇



桜沢 っや子 選

横浜 宮田 昭

愛知 沢田 忠士

○韓国の無窮花ムクワンファは国花なりせば尽くることなく極まりなしと

○女男彫りし道祖神像相睦み韓国にひそと眠れる気配
○漢江のゆるき流れに誰ぞ吹く草笛かなしわれを追ひくる

○地藏尊にチマチヨゴリの子手を合わす姿可憐で仔細ありしか

○ひとすじの弦のひびきを聞く如し釜山港の春の月光
○占いを信ぜぬ吾も手相見の韓のアガシに何故か魅かる

評

無窮花は日本の木槿、韓国の国花である国民の国花によせる思いは深い。道祖神は、悪霊や疫病の侵入を防ぐために峠、辻、村境などの道端に祀られている神である。まさか日本から韓国に逃遊行の道祖神では。下句がたのしい作品。寒い印象の韓国ですがひとすじの弦のひびきの釜山港の春の月光は明るく夢のようで幸せに満ちている。

○備中鍬高く振り上げ畝を打つ六月地中に里芋育つ
○南海の御霊に花を手向けられし陛下の背に波のかがやく

○寒空に鳶と鴉のいつもの喧嘩鍬止め見入る午後のひととき

○赤と白孫の描きし燈台に共に行きたし石狩の浜

○人気無き境内に踊る猿回しのひたすらなれば哀れと思ふ

評

三首目の上句、寒空にトビとカラスの巴戦が原作。巴戦は三者の一人が他の二人に連勝して勝者となる戦いで二者では巴戦とはいわない。長閑かな田園の広がる上空での鳶と鴉の争い。常勝は鴉とありました。午後のひと刻の風物詩。素直に詠まれている石狩燈台、一緒に行きたい思いがこもる。豊川稲荷の境内に見物客もまばらなところでの演技、ひたすらなれば哀れと思うの下句が切ない。大道芸としてまた正月の縁起物の猿回しである。

東京 しらたきよう子

○真白なる冬田に羽を膨らましV字飛行の雁の群をり

○一日で線路も埋まる大寒波雪に不通の電車も凍る

○雪国の共同作業雪掻きはマンホールに埋めて十分に
て終わる

○大雪に呑みこまれたる東京の街の灯りの静まりかえ
る

○信仰を集める越後の七不思議杖に根が生え竹藪とな
る

評

一首目は宮城県の冬田、雁が県鳥という、雪で真白
い田に黒い雁の群れ北国ならではの情景。二首目は
一日の雪で大混乱の都会の交通機関。雪国の共同作
業の雪掻きは手馴れたもの十分で終わるというご近
所との連係プレーも進んでいるが、久し振りに雪に
覆われた東京の街は大さわぎ、その街も夜は静まり
かえっているという四首目。

川崎 吉田 公一

○バスを待つバス停前の雀たち群なして来て餌をつい
ばむ

○春近し朝の寒さも和らぎてバス待つ人らの顔も和ら
ぐ

○天空の澄める高みをジェット機が編隊組みて横切り
てゆく

○水ぬるむプールに遊ぶ子らの声あたりに響き春が来
たれり

評

バスを待つっている自由な時間である。見るともなく
見ている雀の様子を下句にあざやかに詠まれた一首
目。何となく寒さもやわらいで来たと思ったら、バ
スを待つ人たちも明るくなったような気がしたとい
う春を待つ思いが表されている二首目。四首目は、
明るい子らの声に春が近づいているという思いがう
まく詠まれている作品。

近 詠

桜 沢 つや子

○淀みなく筆を走らす会長の新年揮毫墨匂ひ立つ
○一年分の優しさこもる年賀状並べて一日心あた
たか

○幾そ度手を合はせしや灯台守の祖父母に赤き日
の出日の没り

新設管制課程開設に向けて

厳しい寒さ真只中の、海の京都、舞鶴の海上保安学校ですが、本年4月、海上保安学校に実に16年ぶりとなる新設の「管制課程」が誕生します。

開設に向けていよいよ待ったなしの時期となり、入校予定の学生同様に教官の緊張感も日に日に大きくなっている中、2月2日、横田伸治副校長を座長とする各委員による第9回管制課程設置検討会を実施しました。

今回の検討会の目玉は、1月に納入された管制シミュレータ装置のお披露目であり、各委員は装置の多彩な機能に興味を持ち、その立派さに感心して



写真－1 管制シミュレータ室 学生卓

いました。

管制課程入学予定の学生は、本庁・各管区で将来の運用管制官を目指す学生の募集活動をしていただいたおかげで定員20名の採用も決定しました。(女性の比率がかなり高いと聞いております。)

本庁交通部航行安全課交通管理室をはじめとする各方面からの多大なるご支援をいただき、4月からは門司分校と協力しながら同じく新たな教官室と



写真－3 管制シミュレータ室見学会の様子



写真－2 管制シミュレータ室 教官卓様子

なる管制教官室の教官全員で学生の育成に尽力しますので、新設「管制課程」をどうぞよろしくお願いいたします。

(海上保安学校航行援助教官室)

五 管 区

旅客船に対する安全指導の実施 ～近畿運輸局和歌山運輸支局と合同～

平成29年12

月14日(木)、

近畿運輸局和歌山運輸支局と連携し、「年末年始特別警戒及び安全指導」の一環として、年末年始の休暇時期に、多くの人々の利用が見込まれる、



写真－1 第七真誠丸への乗船状況



写真－2 救命胴衣の確認状況



写真－3 救命筏の確認状況

観光遊覧船に対して、事故の未然防止を図り、利用者の皆様に安心して利用していただくため、安全点検を実施しました。

田辺海上保安部管内の和歌山県西牟婁郡白浜町は、白良浜、白浜温泉、白浜アドベンチャーワールド等の観光地が多くあります。船内において飲食が可能で、忘年会時期に集客が見込まれる、白浜町所在の堅田漁業協同組合所

属屋形船「第七真誠丸」に対して、当部所属巡視船こうや乗組員、交通課職員及び近畿運輸局和歌山運輸支局首席運航労務監理官等が船舶に立ち入り、航路の安全性の確認、安全管理規定の遵守、救命設備の備付け、非常時の脱出手順等の確認と事故防止及び非常時対応の措置状況、整備状況を点検し安全指導を行いました。

(田辺海上保安部交通課)

田辺見守りパトロール隊と連携した

海難防止啓発活動の実施

「田辺見守りパトロール隊との初コラボ」

田辺海上保安部では、平成29年11月10日に発足した「田辺見守りパトロール隊」と連携して平成29年12月16日（土）、年末年始特別警戒及び安全指導の一環として海難防止啓発活動を実施しました。



写真-1 漁船船員への周知活動



写真-2 釣り人への周知活動

田辺見守りパトロール隊は、紀南地区海上安全対策協議会が沿岸部における事故防止対策のため、特に年配者に対して救命胴衣着用の声掛けなどを行う組織として発足させたもので、最初のモデル会員として和歌山南漁業協同組合田辺支所が指定されたものです。

田辺海上保安部では、年末年始特別警戒及び安全指導の重点項目として漁船及び釣り人の海難防止を掲げてお

り、「田辺見守りパトロール隊」と連携した活動として、田辺市江川地区の漁船船長に対しては、「基本に立ち返っ

た安全確認・動作の意識付けの徹底」について、また、周辺の釣客に対しては、「救命胴衣の常時着用、連絡手段の確保等」について、リーフレット及び啓発グッズ（ウェットティッシュ）を配布して啓発活動を行いました。

（田辺海上保安部）

淡路島で海の緊急通報用電話

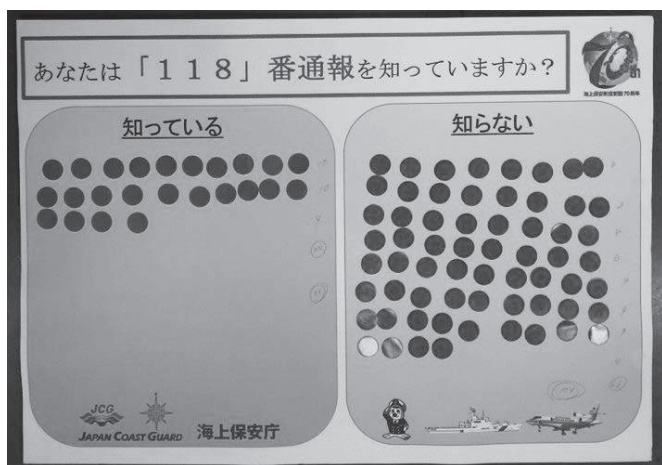
「118番」周知

「保育園児親子とクイーン淡路に

囲まれてうみまる大活躍」

大阪湾海上交通センターは、海の緊急通報用電話「118番」を広く知ってもらおうと、1月13日、洲本市民広場の冬咲きチューリップショー会場で啓発活動を行いました。

「海のもしもは118番」のティッシュペーパーやチラシを市民に手渡しました。うみまるも参加、チューリップショーのオープニングセレモニーにマーチングバンドや風船とばしで出演



写真—1 アンケート、あなたは「118番」を知っていますか？



写真—3 うみまると元気にはしゃぐ子ども



写真—2 アンケート、あなたは「118番」を知っていますか？

した保育園児親子やクイーン淡路らと記念撮影に応じました。
さらに神戸新聞の取材があり、翌日の朝刊には「118番」アンケートの様子と笑顔でうみまると記念撮影する親子が写真入りで掲載されました。
また、アンケート「あなたは118番を知っていますか？」を行いました。来場者に若い親子連れが多かったためか、残念ながら認知度は約2割でした。結果をうけて、今後は、子供から大人



写真—4 クイーン淡路と記念撮影



写真－5 隣接するショッピングモールで周知

まで、幅広く周知活動を展開する予定です。
淡路島で唯一の海上保安庁機関として地域に寄添い、恵み豊かな島の海を安全で安心な海とするために、あらゆる機会を通じて「118番」の周知や海上保安庁の理解促進を図り、市民との連携を深めて行きたいと考えています。

（大阪湾海上交通センター）

南海トラフ巨大地震に備えて

非常参集訓練を実施

〓道路崩壊を想定して代替参集路を踏査〓

大阪湾海上交通センターは、南海トラフ巨大地震で道路が崩壊して通行不能となった場合に、職員を安全に迅速に参集させるために、1月18日、代替参集路を使用した非常参集訓練を実施しました。

大阪湾海上交通センターは、全国の7つの海上交通センターで最も高い、標高236メートルの高台にあります。このため、道路は山間、急勾配で狭隘です。10月の定期異動者など2名が、代替参集路を踏査しました。既に、4月の定期異動者など13名は7月までに踏査を完了しています。

踏査の結果、①街灯が無く、夜間は灯火の携帯が必用②道路のメンテナンスが十分でなく路面の土砂や落葉に注意が必要③イノシシ等の動物が生息④携帯電話の不通区間があることが判明



落ち葉や土砂の積もった道を
先行する20代と必死に追う50代

しました。これらの情報は職員で共有し、安全な参集に役立てます。
今後も、定期的に南海トラフ巨大地震に備えた様々な訓練を実施します。

（大阪湾海上交通センター）

昭和三十一年三月二十五日
第三種郵便物認可
（隔月一回五日発行）

「燈光」

三月号 第六十三卷 第二号

